

2025. 3. 17. (MON).

校長室の窓から

『この子らと共に』～For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『最後にまた大きく育った』

14日(金)、中学校の卒業式を挙行しました。またまた手前味噌ではありますが、とっても良い式にできたと思っています。参列してくださった保護者会長は「泣きっぱなしで疲れちゃいました!」と何度も仰いました。毎回の卒業式予行の最後に私が講評をする場面があります。その時に言うことは毎回同じです。すべては書きませんが、さわりを少しだけ紹介します。

卒業式は、最後の学習の場面です。この学習は国語や数学や英語の学習と違って知識や考え方を増やしたり鍛えたりするものではありません。「感動」を通して心を豊かに鍛える場面です。豊かな心をもった人は素敵です。人とうまくやってもいけます。そして、そういう力こそが将来の貴女たちに役に立ちます。…とまあ、そんな話です。

卒業証書授与の場面で、最初の生徒が担任の先生の呼名に対して大きな声で返事をしました。それは講堂に響き渡るほどの声で、今も私の中でこだましています。普段のこの生徒の様子からは想像できないような張りのある大きな声でした。「あなたは今年度の卒業生の最初だから…」「あなた次第で、後に続く人たちが…」担任や学年の先生からそんな風に言われていたのかもしれません。それに応えての大きな声での返事です。彼女のその気持ちが想像できるため、私の魂も震え、一気に感極まりました。

私の式辞を聴きながら涙してくれている卒業生がいます。在校生代表による送辞、卒業生代表による答辞、卒業の歌、それぞれの場面で頬を伝うものを拭っている生徒の姿が目につきました。また、理事長の祝辞を頷きながら聴いている卒業生たちも少なくありません。なんて素敵な学習の場面でしょうか。最高に心が耕されました。

もう一つ、中学校の卒業式ならではの取組があります。卒業式の閉会後に、後輩や教職員や保護者に向けて生徒たちが自ら考えた出し物を披露します。自分たちの中学校時代を振り返ると共に関係者の皆様方に対して感謝の気持ちを述べる場面です。

歌やメッセージで綴られたその表現が実に純粋でストレートで、聴く者の心に真っ直ぐに届きます。ステージ上の卒業生たちと観客席の者とが一体となっていることが実感できて心が温かくなります。そしてこの場面でもお互いに豊かな心が育ちます。

『子どもが変わった』『ドライになった』、そういうことを聞きます。しかし、本校の生徒たちの姿を観る限りそんなことは思いません。30~50年前の子どもたちと同じく純粋で、温かく柔らかい心を持っていましたし、行事の度にそれを育てています。



2025. 3. 8. (SAT).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ~ For the students ~

京都光華中学校高等学校
澤田 清人

『特別な場面でこそ得られる学び』

先週土曜日の卒業式に出られなかつた人が一人いました。いつも元気で、明るく挨拶をしてくれる生徒なので、『一体どうしたんやろ?』と思い、心配もしていました。実は発熱し、どうしても出席が叶わなかつたということです。担任の先生から卒業証書の渡し方を相談されたので、「それならば…、」ということで第2弾の卒業式をすることにしました。教頭先生の司会のもとで、卒業生入場から行いました。高校3年の担任の先生方も全員が出席され、大きな拍手に迎えられての入場です。保護者の方と2人が着席されて卒業証書授与式の開式です。

「総礼 皆さま お仏壇にお向かい下さい 合掌」全員が校長室のお仏壇に手を合わせて小さな卒業式が始まりました。「卒業証書授与 卒業生、起立・礼」一人の卒業生が指示に従って行動します。「卒業証書 第22000号〇〇〇〇 平成〇〇年〇月〇日生まれ 上の者は本校普通科を卒業したことを証明する 令和7年3月1日 京都光華高等学校 校長 澤田清人」高らかに読み上げました。本来の卒業式に出席していたらこの生徒に直接証書を手渡すことはありません。そう思うと、なんだか不思議な感動がありました。その思いは卒業生や出席者も感じてくれたのか、校長室が一気に暖かな緊張感に包まれました。

「学校長式辞 卒業生 起立・礼」卒業生と1対1で礼をして話を始めました。さすがに本番と同じに式辞を読み上げはしませんでしたが、一番伝えたいことはしっかりと伝えました。次は本来の卒業式にはない次第です。「担任祝辞 卒業生 起立・礼」号令が終わると担任の先生が優しく話をされました。「以上をもちまして卒業式を終了します 卒業生退場 みなさま拍手でお送りください」爽やかな感動のなか、一人の卒業生が校長室を退場していきました。

他に誰からも祝ってもらったのでしょうか。後ほど幾つかの花束を抱えたその卒業生に会いました。「いい卒業式にできたね!」そう言うと、「はい 校長先生 ありがとうございました!」そう答えが返ってきました。担任の先生と本人、保護者だけで証書を渡すというやり方があったとは思いますが、そうせずに良かったです。

7日には、学年末テストが終わった後で全校集会をもちました。2026年度から本校教育が大きく変わるのでですが、その内容を生徒に伝えるための集会です。理事長と校長からの説明が終わった後、質疑応答の場面を設けました。質問は出るかな?と思ったところ、「さっ」と手が上がりました。「他にありますか?」教頭先生の問いかけに次々と手が上がりました。中高以外の教職員はその様子に驚かれたことだと思います。全校集会のたびにこういった場面を設けてきた成果がここで出たように思いました。“特別な場面でこそ得られる学び” 2つのシーンでそれを感じたところです。



2025. 3. 3. (MON).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ~ For the students ~

京都光華中学校高等学校
澤田 清人

『凛とした姿』

3月1日（土）、高等学校の卒業式を挙行しました。

厳粛な中で整然と執り行うことができ、どこに出しても恥ずかしくない式にできたと思っています。本校の生徒たちは素直で礼儀正しいので、その良さが十分に發揮された式でした。「みなさん、行儀がよかったです」「所作が素晴らしいかったです」など、参加された多くの保護者やご来賓の方々からその点をお褒め頂きました。

私が一番良かったと感じているのは式歌です。今年度は自分たちで選曲した「正解」という曲の合唱を披露してくれたのですが、この曲が彼女たちの気持ちをとてもよく表していました。卒業生たちも感じるところがあつたらしく、前日の予行の時から泣きながら歌っている人も少なくありませんでした。本番ではその様子を観ながら多くの大人が“もらい泣き”をしてしまいました。在校生代表として式に出席した高校2年生たちにもよいお手本になりました。おそらく来年度は、彼女たちも式歌には大いに力を入れてくれるのではないかと思います。

個性的な生徒たちが、様々な次のステージで頑張ってくれることを期待します。

もう一つ、凛とした姿があったので紹介します。こちらは2月27日（木）です。中学陸上部の駅伝チームが京都市体育表彰を受賞しました。その式典での本校生徒の態度が実に素晴らしいのですが、特に最後に受賞者代表で「謝辞」を述べた生徒の態度とその内容とよかったですので改めて紹介したいと思います。もちろんすべて暗記して発表しました。しかも、その口調が実に自然で、とても“丸暗記”しているように聞こえなかったのが特によかったです。

本日、出席いたしました選手を代表して、お礼の言葉を述べさせていただきます。本日は、「京都市体育表彰」という素晴らしい賞をいただき、ありがとうございました。

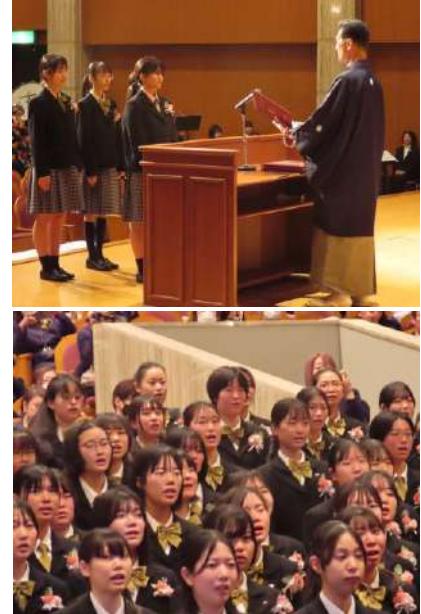
私が中学校に入学した当初は、長距離の部員は3名しかおらず、日々の練習でも一人で走ることが多かったように思います。しかし、短距離で活躍する先輩方、仲間に刺激をもらい切磋琢磨しあう中で、短距離長距離など関係なくチーム全員駆伝を目標に取り組んできました。どのチームもみんなで苦しい練習も乗り越えたからこそ、今回の優勝や区間賞といった成果を掴み取れたと思います。これからも日々一緒に練習できる事への感謝を忘れず、仲間を大切にし、高め合えるチームを創っていきます。

このような結果を残す事ができたのも、熱心に指導していただいた顧問の先生をはじめ指導者の方々、家族や仲間など多くの皆様のお陰だと、心から感謝しています。

今後も今回の優勝や入賞で学んだことを財産とし、日本一を目指して、精一杯努力していきます。

本日は、本当にありがとうございました。

選手代表 京都光華中学校 陸上競技部 江藤 冬寧



2025. 2. 22. (SAT).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ~ For the students ~

京都光華中学校高等学校
澤田 清人

『素敵なおーストラリア』

19日(木)中学校の修学旅行先であるオーストラリアから帰りました。怪我や病気の生徒が一人もなく、全員が元気で帰れたことがまずは一番よかったです。多くの旅の思い出の中で今回は4つに絞って書き留めます。

まずは、サンシストカレッジでの学校交流です。地元のお嬢様たちが通う私立の女子校で、小学生から高校生までが通っています。木々と芝生に覆われた高級住宅街にあり環境も抜群です。生徒たちは上品な雰囲気をもちながらも一様にフレンドリーで、気軽に手を振ったり、会話を楽しみに来てくれたりしました。中心になってくれた日本語を学ぶ高校生の私達への配慮を忘れない言動が印象的でした。

私のあいさつの場面のことです。台湾とは違ってこちら英語圏です。さすがに緊張しました。『校長先生、大丈夫やろか?』うちの生徒たちの心配そうな眼が私に注がれているのが分かりました。

「校長先生が、英語が上手でビックリしました。」「ステキなロール・モデルになっておられますね。」生徒や旅行ガイドの方から頂いた感想です。やっぱり嬉しいものです。

2つ目は生徒を受け入れて下さったホーム・ステイ先の方々です。裕福な家庭の方が多いらしく、2日目の朝に生徒たちから聞いた話に驚きました。「家の大きなプールで泳がせてもらった。」「フェラーリが3台、ランボルギーニが2台あった」「3泊目から宿泊するホテルよりもうちの方がいいと言われた。」などの内容でしたが、決してその裕福さが嫌味でなく、私たちとの間もごく自然にフレンドリーな振る舞いをされる方々で非常に好感が持てました。家族との別れの場面では涙もあったようです。話をしながらそのことを思い出して涙する生徒もいました。たった2泊で生徒たちを自分の家のように感じさせるおもてなしのされ方には頭が下がりました。

3つ目はブリスベンの街です。シドニー、メルボルンに次ぐオーストラリア第3の大都市ですが、その華やかさが印象的でした。特に夜の景色が美しかったのと、古さと新しさとを見事にマッチングさせた街のつくりに驚き、感心させられました。また、そこに暮らす人々は多種多様で、人々が文化や宗教、人種や民族の違いを乗り越えて仲良く精力的に生活されていることが見てとれました。

最後は最終日に行ったゴールド・コーストです。いつまで見ても飽きない海の景色が今も脳裏に焼き付いています。私はこれまであれほど続く長い水平線を見たことがありません。美しいのは海だけではありません。観光地としての砂浜や街並みです。ここで暮らせたらどんなに幸せでしょうか。そんなことを思ったりもしました。

生徒はオーストラリアで多くのことを学び成長しました。その様子を直に見られること、少しばかりそのお手伝いができたことを嬉しく思います。



2025. 2. 11. (TUE).

校長室の窓から

『この子らと共に』～For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『この思い 誰かに伝えたい！』

2月10日・11日は京阪神一斉の私立高校入試日です。本校にも多くの中学生が受験に来てくれました。私は、すべてに責任を負う立場ですが、入学試験では面接試験を担当しました。

私が担当した生徒さんは全員が素晴らしいです。最初に“本校を志望した理由”を尋ねます。これに関しては、皆が準備してきた内容をスラスラと答えます。その後は、その生徒の答えを拾って質問を考えました。「看護師に成りたい」に対しては「なぜ看護師に成りたいのですか」とか「そう思ったきっかけは何ですか」という具合にです。皆さん、自分のことですから、自分の言葉でしっかりと答えていました。

面接試験を課しているのは推薦と専願で受験している人たちです。合格すれば本校に入学することを前提としてくれているわけですが、面接をしながら、『全員合格してほしい』と思い、早くも彼女らと楽しく会話する様子を思い浮かべたりもしました。それほど素敵な生徒たちでしたし楽しい時間でした。

さて、多趣味な私の趣味の一つに読書があります。大体1週間に1冊のペースで読んでおり、傍らにはいつも本があります。一時はセコ版（古本）を買っていたこともあります。いつの間にか本棚に入りきらなくなつて使わない部屋と廊下に平積みにしており、妻からは喧しく注意され続けています。そんな私ですが、日々人に紹介したい本に出会いました。右上に表紙の写真を掲載している通り「少年と犬」という小説です。犬好きの人（いや、そうでなくても）には是非とも読んでもらいたい一冊です。短編集ですが、一つひとつが独立しつつも繋がっていて、全体として一つのストーリーになっています。最後には『なるほど、そうなるのか！』と感心しつつ久しぶりに読書で涙を流しました。電車やバスの中で読んでいなくて良かったと思ったほどです。読後、息子夫婦も犬を飼っているので、早速、嫁に貸しました。彼女は3日ほどそれを読み切り、感想を聞かせてくれました。“息子にも読むことを勧めた”と言ったのですが、それを聞いて彼女が心を動かされたことが伝わってきました。よい本やドラマ、興味深い映画などはまず間違いなく人に勧めたくなるものですからね。

この小説は既に映画化もされ来月公開予定だそうです。HPでその内容を探ってみましたが、是非、妻を誘って映画館を訪れたいとも思っているところです。

ところで、私はなぜこうしてエッセイを綴り、発信し続けてきたのでしょうか。教頭時代からですのでもう20年、1000枚位書いてきたことになります。

『今この思いを誰かに伝えたい！』そんな幼稚な気持ちですが、そうなのだと改めて気づきました。『少年と犬』という小説に出会ってそんな単純なことに気づき、妙に納得しつつ照れ臭い気持ちになっています。



2025. 2. 4. (TUE).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ~ For the students ~

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『特別な時間』

1月30日（木）、京都中学高等学校仏教青年会連盟主催の「涅槃会のつどい」を実施しました。当番校として3度のつどいを無事に終えることができて、今はホッとしています。なお、他校の先生方から異口同音に「すべて生徒による進行で素晴らしい」とお褒めの言葉をいただき喜びを感じています。

いつも言いますが、生徒が褒められるのは、それを指導している教職員が褒められることです。教職員の取組と活躍を嬉しく誇らしくも思います。見えない部分ですが、今回も玄関から控室、控室から会場までの誘導も生徒が行いました。特に、本校生徒の静かな入退場と講演前後のあいさつ（「お願いします！」「ありがとうございました！」の発声）については、他校の生徒も先生方も大変驚かれたようです。本校の生徒にとって“当たり前”的なことも、他校の生徒から見れば称賛に値することなのだと知ってほしいとも思っています。

「目に見えている部分で判断するのではなく、自分の奥底にある深い理解力をもって物事を見つめよう！」をテーマに語られたご講演もとても興味深く聴かせて頂きました。献灯・献花→礼拝→焼香→校長挨拶→講演→合唱と続く非日常の1時間

は将に“特別の時間”で、生徒が自らの生き方を見つめる上で尊いものになりました。

また、2月1日には「キャリア教育講演会」を実施しました。様々な職業に就いている卒業生に来てもらい、その仕事の魅力や苦労を中学生と高校生に話してもらいました。CA や医師、税理士や保健師、教師や看護師の他、営業職や製造業や演奏家などの仕事に自分を発揮している人たちは一様にキラキラと輝きを放ち、中学生高校生にとって憧れの的だったに違いありません。彼らは自分たちが中学生高校生だった頃の話も盛り込んでくれました。一応に将来に夢と希望を持ちながら同時に不安も抱える普通の生徒だったと言っておられました。そして、夢を叶えた先輩たちの姿は、現役の生徒たちには刺激的で、素晴らしいモデルとして映っていたに違いありません。

もう一つ、同日に実施した「異文化理解学習発表会」についても言及しておきます。

国際挑戦科の生徒によるプレゼンが主な内容でしたが、今年は、初めてそれを見た昨年度とは違った見方ができました。今の高校1・2年生は昨年度から知っています。

『“あの子”がここまで発表ができるようになるんだ！』という驚きをもって観ました。留学という特別な経験と普段の授業のあり方がこれだけの力をつけるのだという思いです。“特別な時間”は、生徒の、いや人間の成長にとって大いに必要であると改めて感じているところです。“特別な時間”は感性を磨き、人間性を高める絶好の機会です。そして、このような行事こそが学校教育の醍醐味だと思います。



2025. 1. 28. (TUE).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ~ For the students ~

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『天才イチローに学ぶ』

野球をあまり知らない人でもイチロー氏の名前を知らない人はいないのではないかと思います。野球人と言えば、最近はとかく大谷翔平選手が話題になりますが、今から20年前の彼の大活躍がなければ大谷選手の登場もなかったかもしれません。また、記録を作るたびに大谷選手が少年時代に書いた日記や目標が紹介されますが、実は20数年前にはイチロー氏のそれが道徳の教科書に掲載されたほど話題になったものです。

彼の日本野球界とメジャーリーグでの活躍は本当に凄かったです。※公式HPより

その彼が日米の野球殿堂入りを果たしました。おっと、「殿堂」について解説しておいた方がよいかもしれませんね。「殿堂」とは「その分野の中心的存在である建物や施設」のことですが、その中に業績のあった人々のグッズや記録、解説を展示したりして広くその功績を世間に知らせるという目的に使われます。

アメリカメジャーリーグでの殿堂入りがどれほどすごいことかはそれに選ばれる過程を知れば分かります。先ずメジャーリーグで10年以上プレーすることが絶対条件です。そして、全米野球記者協会に10年以上在籍する記者による投票で75%以上の票を獲得して初めて選考されます。打者の場合は最低でも通算3000本以上の安打を放ったことが目安となるということです。日本のプロ野球界に「名球会」という組織があり、これに入ることがプロ野球選手にとっては大変名誉なことなのですが、その資格となるのが打者なら通算2000本安打、投手なら通算200勝です。このことからもメジャーリーグの殿堂入りがいかに難しいことかが伺えるかと思います。

通算安打数3089本(日米通算4367本)、10年連続200安打&ゴールドグラブ賞獲得、2004年の年間安打数262本は今も破られていないメジャー記録です。これらのことからもイチロー氏が選ばれたのは当然だと言えるでしょう。

これまで数々の名言を残しているイチロー氏ですが、この時も印象的なコメントを発表しました。2つ紹介します。投票を行った394人の記者のなかで1人だけが殿堂入りに賛成しなかったことに対しては、「不完全ないのがいい。不完全だからこそ完璧を求めて生きていく。」若者に対しては、「才能ある人たちはたくさんいます。自分の能力を生かす能力はまた別にあるということは知っておいてほしい。」

イチロー氏に憧れて野球選手になった人が多くいます。彼の発言や活躍に勇気をもらって頑張ってきた人はもっとたくさんいます。永遠に破られないだろう数々の記録を打ち立て、今も活躍する彼はまさしく野球界の天才です。天才イチローに今回も強く影響を受けました。私たち教師の仕事は「生徒の能力を引き出し伸ばすこと」です。本人が気づいていない能力もあるでしょうが、それを引き出し伸ばす力を身に付けてはならないとイチロー氏のコメントを聞いて改めて思ったところです。



2025. 1. 23. (THU).

校長室の窓から

『この子らと共に』～For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『寒さの中でも逞しく』

今年もうちの山茶花が美しく咲き始めました。落ちた花びらの掃除が大変ではありますが、3月上旬までの間、毎朝出勤時の私の心を和ませてくれます。

ところで、寒い中で咲く花の代表が山茶花です。童謡「たき火」の2番の歌詞を思い出します。「さざんか さざんか咲いた道 たき火だ たき火だ 落ち葉焚き あたろうか あたろうよ しもやけおててが もう痒い」

今の子どもたちはこの歌詞の意味を理解できるのでしょうか。たき火を見なくなりました。しもやけが痒いという経験もないかもしれません。今時、たき火などしていたら『危険だ！』ということで警察に通報されるかもしれません(笑)。

私が小学生の頃は、まだ学校への登下校途中にたき火をしている人がいて、それにあたるということがありました。指先にしもやけができるおり、火にあたってその部分が温まると痒くなりもしました。そんな経験のない今の子どもたちにはこの歌は理解不能なのでしょう。温暖化の影響もあるのでしょうか。道端に氷が張ることもなくなりました。道路が舗装されて、そもそも“水たまり”がないこともあるとは思いますが、私たちの子どもの頃は水たまりの氷を割りながら小学校へ登校したものです。また、土や芝のところをあえて選んで霜を踏んで歩いたこともあります。こんなことを書くと『昭和やなあ…！』と笑われるかもしれませんね。そして、この文章の内容が理解できるのは50歳以上の人たちに限られるのかもしれませんとも思います。

いろいろと変わったところは確かにありますが、山茶花のように冬に咲く花はやっぱり今も咲いています。春には桜、夏にはひまわり、秋にはコスモス、少々の気候変動に左右されることなく、その季節が来ると花を咲かせる植物をすごいと思います。その中でも、寒い冬に咲く花を特に美しいと感じ、逞しさを感じもします。

朝、出勤してくると、寒いなかで既にグランドやテニスコートで練習をしている生徒たちがいます。元気よく「おはようございます！」と声を掛けてくれます。この様子は植物と同じように私たちの少年時代から変わらない情景の一つです。情報機器や家電製品、働き方や授業の進め方など、時代と共に変化するものが多い中で、どんなに時代が変わろうとも変化しないもの、いや、変えてはならないものもあると思います。寒い中で一生懸命机に向かって明け方まで勉強するということもその一つです。現在高校3年生は最後の定期考査に臨んでいます。先週末には「大学入学共通テスト」が実施され、今後は各大学の一般入試が始まっていきます。寒いさなか、“受験シーズン”の到来です。これも昭和の時代から変わらないことです。寒くても逞しく頑張ってほしいと思います。寒い中でこそ美しく咲く花があるように、今この時期に力を尽くすその姿が逞しく美しいと感じます。みんな、最後までがんばるんやで！



2025. 1. 18. (SAT).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ~ For the students ~

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『よりそう』

今年で阪神淡路大震災から30年が経ちました。あの時妻のお腹の中に居た下の息子が今年で30歳になるのかと思うと“時の流れの速さ”を感じずにはおられません。

神戸の東遊園地には竹の灯籠が設置され、毎年ろうそくの灯りで言葉がつくられます。今年のそれは「よりそう」でした。

さて、「よりそう」という言葉ですが、教育の世界ではよく使われます。教員養成に携わっていると、学生からもよくこの言葉を聞きます。おそらく、多くの授業の中で先生方から聞かされているのでしょう。私もこの言葉を大切だと思っていますが、一方で軽々しく使う言葉ではないとも思っています。というのも、生徒に寄り添うには相当な“覚悟”がいるということを経験してきたからです。「よりそう」とは、単に話を聞くとか傍にいるとかではありません。彼らの生活に入り込み、支え激励し、時には叱咤する必要もあります。またその子の親と膝を交えて長時間話し込むこともあります。これまで多くの生徒とそういった経験をしてきました。私が指導してきた学生にはそんなことを語りますが、よい機会なのでここに書きました。

阪神淡路大震災で被災した人たちに寄り添うこともそう簡単ではありません。各TV局で特集が組まれ、あの時の映像を見ました。家族を亡くされた方々の声を聞くこともあります。改めてその厳しさをと苦しさ、悲しみを思います。そして、街の復興と人々の気持ちの切り替えと前向きな情熱から、人間の強さ・逞しさを感じているところです。

1月17日には、各教室で、各家庭で、職場のあちらこちらで、是非ともこの話題に触れてほしいと思います。約6400人の尊い命とその何倍も人の日常生活が奪われたあの事実と経験から学び、私たちの生き方に活かしていきたいと強く思います。

先週の3連休には嬉しい本校生徒の大活躍もあったのでそちらも紹介します。

まず、高校のソフトテニス部です。近畿インドアソフトテニス大会の団体戦で見事に優勝をしました。個人戦でも3位と2ペアが5位に入賞するなど、この大会では大活躍をしました。もう一つは第43回全国都道府県対抗女子駅伝競走大会です。本校の中学生が第8区を走り京都府の優勝に貢献しました。この生徒は昨年度も出場しましたが思ったような走りができず悔しい思いをしたと聞いています。今年は力強い走りで見事にリベンジを果たしました。本当におめでとう。

スポーツで結果を残すことは難しく、そう簡単には実現できません。それができた背景には、選手たちを支え寄り添い続けた人たちがいることを忘れてはいけません。そして、その寄り添い方は決して簡単なものではなかったことを繰り返しておきます。



2025. 1. 14. (TUE).

校長室の窓から

『この子らと共に』～For the students～

京都光華中学校高等学校
澤田 清人

『3学期スタート』

新年あけましておめでとうございます。2025年、令和7年が始まりました。また1月9日には始業式を行い、本校でも3学期がスタートしました。生徒・保護者の皆様、本年もどうぞ宜しくお願いします。

この年末年始は、ホントに久しぶりに家族と過ごしました。「のんびりと」と書きたいところですが、実際にはそうでもなかったです。“今日はコレ、明日はアレ。”と毎日がしなければならないことややりたいことの連続で、時間と労力についてにお金が費やされていくという何とも忙しく落ち着かない毎日でした(笑)。

さて、挿入した写真の説明です。先ずは左側、これは今年度の年賀状です。写真は私の甥の結婚式の際に家族で撮影したものと初孫のものを使いました。文章は以下の通りです。「京都光華中学校高等学校での生活も2年目を迎えました。何事にも明るく積極的に取り組む生徒たちと楽しくやりがいのある毎日を送っています。長男宅には4月に長女（桜采おと）を授かりました。また、次男夫婦はバンコクで頑張っています。家族が仲良く健康で過ごせる幸せを感じながら一日一日を大切に過ごして参りたいと思っています。本年もよろしくお願い致します。令和7年元旦」

昨年は夏の終わりに体調を崩し、ことのほか健康の大切さを感じました。これまでに、心臓の手術も経験したことがあります、毎日があんなにしんどかった経験は初めてでした。健康第一。その意味を強く感じている今日この頃です。

右側の写真は始業式の一コマです。私の話の後、今回は高校3年生に対して壇上に上がってくるよう促しました。中学1年生から高校3年生までが一堂に会する場面は今回が最後だから、高3生に仲間や先生方、後輩に対してコメントを残してほしいとの思いからです。ご覧の通り4人が話してくれました。マイクを握っている生徒は初めての登壇です。小学校から12年間本校に通ってくれました。「私はこんなところでこんな風に話ができる人じゃ全くなかったけれど、仲間や先生方のお蔭で成長させて頂くことができました。本当に感謝しています。ありがとうございました。」飾らない言葉で語られたそのコメントが妙に心に響いたのは私だけではなかったと思います。

始業式の話は次のように締めました。今年度のキャッチフレーズは“Ask what you can do for the KOKA!”（あなたが光華のためにできることを考えてほしい）でした。今年度に残された僅かな日々を思いっきり楽しみながら、自分のできることに全力で頑張ってほしい。そのことは間違いなく光華のためになります。



2024. 12. 27. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』～For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『居場所と出番と自分のことは』

「1・2年の時は全然学校楽しくなかったし、行事ごとなんかも“なんで行かなアカンの?”て思ってたけど…、3年になって、みんなクラス仲よしやし、ダンスとかお化け屋敷とかやってもすごく楽しくて…。それに、みんなをまとめることができたので良かったです。」

終業式で私の話の後にコメントを求めたところ、3年生が登壇してきて写真のマスクをつけた方の生徒が上のように言いました。この言葉が妙に心に響いたのはおそらく私だけではなかったと思います。

写真に写っているのは「Move!」の際に3年3組を引っ張ってきた2人です。上のコメントにある通り、それまではどちらかというと行事をはじめ、学校生活に積極的に関わろうとはしてこなかった部分があった生徒たちです。上の写真でマイクを握っている生徒は小さな頃からダンスをやっており、クラスでダンスを創作するうえでリーダーになりました。担任の先生がそのようにもっていったのかもしれませんし、仲間内で選ばれたのかもしれません。そしてその際、友人である隣の生徒を引っ張ったというところでどうか。元々2人ともリーダーの素質があったのでしょう。「Move！」の取組をきっかけとしてドンドンとその能力を発揮し始めました。

クラスの生徒たちも彼女らのリーダーシップを認め、盛り立てつつも見事なフォローワーシップでもって付いていったようです。その結果、「最優秀賞」という結果まで得られたのでした。休み時間に冗談を言い合ったりするときには楽しそうな表情を見せる彼女らでしたが、辛気臭そうな雰囲気を醸し出していた2年生の頃の2人を知っているだけに、この変化は私にとっても嬉しい驚きでした。ましてや担任の先生や学年の先生方にとっては“教師冥利に尽きる”くらいの喜びだったと思います。

これまで何度も「生徒に居場所と出番をつくること」の意味を強調してきましたが、それが実現し、生徒が蘇った瞬間を見た思いがしました。だって、1年前の姿からは、全校生徒が見守る壇上で自分のことを話すことなど到底想像できなかったのですから。

もう一つ。この時のコメントが聴く者的心に響いたのは、自分の言葉で話したからだと思います。決して美しい言葉でも文法的に正しい言葉ではありませんでした。しかし、その表現の中に彼女らしさが溢れ、聴く者の心に届いたのだと思います。

「居場所と出番と自分の言葉」の大切さを再認識した出来事でした。このことは日常の学校生活の中で特に大切にしなければならないことです。また、よい授業をつくる上でも参考になる部分があると思うので心に留めておく必要があるとも思います。



2024. 12. 21. (SAT).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ~ For the students ~

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『夏から冬へ』

2学期が終了しました。思えば今学期が始まった頃はまだ夏真っ盛り。毎日「暑い、あつい！」と言っていました。実際に「真夏日」の日数は観測史上最多だったそうです。そして今、私たちの口から出るのは「さぶっ！」という一言。2学期の間にほんの短い秋を挟んで夏から冬へと季節が移りました。

この4か月間、本当にいろいろなことがありました。「おおきに祭」に始まり、「伝統文化学習発表会」、

「Move！」に高校2年の「研修旅行」です。この間に2回の定期テストと部活動の試合や発表会など、それこそ次から次へと諸行事があり、目の前のこと気に全力を尽くしているうちに今になったという感じでしょうか。

生徒の皆さんも先生方も本当に忙しかったことでしょう。お疲れさまでした。どれもこれも素晴らしい思い出で、甲乙つけがたいですが、私の中では、学校行事では「Move！」、そして部活動では中学陸上部の「駅伝」が強く印象に残っています。

今年も「Move！」は大いに盛り上がりいました。京都光華を代表する自慢の行事です。女の子ばかりなのに、いえ女の子ばかりだからこそでしょうか、あの盛り上がりは…。とにかく、他校の生徒や保護者、関係者を見てもらいたいと強く思います。当日観に来られなかったALTのキース先生に後にDVDを渡したところ、次のようなメールが返信されてきました。Thank you for the video. I just watched it. The girls in 3-6 are the English class ladies. They were all amazing. (ビデオをありがとう。すぐに観ました。3-6の女子は国際学科の子たちですね。彼女たちはすごい!)

保護者の皆様方も、ご自身のお嬢様の映像を何度も見返しておられると思います。キース先生は3-6だけを教えているので、このクラスに関心が向くのでしょうか。

中学校の「駅伝」は、全国優勝を目指して闘いました。京都市大会、京都府大会、近畿大会での優勝。そして全国大会では初出場での5位入賞。全国制覇の夢は叶わなかつたものの素晴らしい結果を残してくれました。笑顔、苦しそうな表情、ゴールに倒れ込む様子、Vサインをしながらゴールテープを切る様など、一つひとつのレースにドラマがあり、今も選手たちの頑張る姿が目に浮かびます。

「Move！」と「駅伝」を挙げましたが、その他の諸行事においても、頑張った分だけ生徒たちは力をつけたと思っています。「生きる力」です。この力を簡単に説明はできませんが、頑張った人の中にしっかりと蓄えられ、今後の人生の“ここぞ”という時に役に立つ力です。今年度はまだまだ続きます。明日からの冬休み、ちょっと休憩をしたら、また次の目標に向かって動き出してほしいと思います。皆さんのか可能性は無限です。努力すればするほどそれは発揮され高められていきます。これからも頑張っていきましょう。私たち教職員もお手伝いします。



2024. 12. 16. (MON).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ~ For the students ~

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『光り輝く華となれたか』

13日の金曜日に高校2年生の研修旅行から帰りました。

今年の台湾は昨年度よりうんと寒く、夜には防寒着が離せないくらいでした。でも、雨に悩ませられることはほとんどなく、生徒たちの最大の楽しみスポットである九份では素晴らしい景色のなかを歩き、食事を楽しむことができました。

「千と千尋の神隠し」のモデルとなった九份の夜景は実際に美しく、特にアニメの中での温泉のモデルになった建物の真ん前にあるレストランで食事ができたことは一生の思い出になったことだと思います。

また、今年度は昨年度のプログラムにはなかった「十份でのランタン（天燈）飛ばし」と「台北101の展望台からの景色」も生徒たちの心に刻み付けられましたことだと思います。

研修旅行では、普段ほとんど話したことのない生徒とも会話ができ、新しい発見がたくさんありました。行く先々で、持ち前の明るさと礼儀正しさを見せてもらいました。研修旅行団の団長として嬉しい気持ちにもさせてもらいました。

15日には、中学校陸上の「Road to The Championship of Ekiden Race of All Japan」の最終章である全国大会が滋賀県の希望が丘公園で行われました。各都道府県の代表が集まるだけにレベルの高い戦いになりました。優勝を目指してきた本校は、見事5位入賞を果しました。選手も顧問の先生も、そして応援の者たちもちょっぴり悔しさを感じながらも最後まで頑張った選手たちに大きな拍手を贈りたいと思います。最後の集合まで居られなかった私のもとへ、今朝選手たちが結果報告と応援のお礼を述べにやってきました。

「中学校の優勝は後輩に託し、中3生は高校駅伝で全国優勝を目指してほしい。」そんな風にコメントしました。

中学駅伝の会場を後にした私は京都コンサートホールへとバイクをとばしました。「全国高校生伝統文化フェスティバル」が開催され、オープニングセレモニーで本校の和太鼓部が演奏をしたからです。西脇京都府知事は、その挨拶の中で力強い見事な演奏だと褒めて下さいました。その後、和太鼓部の生徒たちと本校の茶道部の生徒たちのお点前によるお抹茶を頂き、素敵な時間を過ごすこともできました。今日付の京都新聞には駅伝と伝統文化フェスティバルで活躍する本校生徒の様子が掲載されています。この1週間、本校生徒は至る所で“光り輝く華”となりました。そんな生徒たちを校長として誇りに思います。



2024. 12. 6. (WED).

校長室の窓から

『この子らと共に』～For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『3rd stage Clear!』

朝番の冷え込みが冬の訪れを実感させる時期になりました。通勤時にはもうダウンジャケットを手放せません。一方、いつの間にか庭の山茶花が蕾をつけてきました。もう少しで薄紅色の花をたくさん咲かせてくれることでしょう。楽しみです。

さて、中学陸上部の駅伝全国制覇への道（Road to The Championship of All Japan Ekiden Race）を追いかけています。これまで、京都市大会（10/12）と京都府大会（11/10）をそれぞれ圧倒的な強さを見せての優勝という結果を出してきました。そして12月1日（日）、太陽が丘総合運動公園で近畿大会が行われました。2府4県からそれぞれ5チームが出場しています。出場チームは各府県上位の強豪ぞろいですから、京都府で優勝したとはいえ、そう簡単には勝たせてはもらえません。応援する私たちも強い緊張感を現地へ行きました。また、本校は昨年度のこの大会で優勝しているため、他校からマークされてもいます。選手たちは連覇がかかっているということでの重圧を感じていたはずです。

『駅伝競走にはちょっと暑すぎるかな』と思えるほど的好天候のもと、スタートが切られました。1区を任せられたのはチームで唯一人の2年生。昨年度も出場しているとは言うものの“花の1区”を走るのは初めてです。連覇がかかっていること、先輩に迷惑はかけられないという強い思いとで少々力んだでしょうか。焦って飛び出しました。（ごめんなさい。勝手にそう思っているだけで、監督からそういう指示があったのかもしれません。）1位で競技場を出でていきましたが、戻ってきたときには前に10人がいました。『11位か。出遅れたなあ』私以外の者もそんな風に思ったかもしれません。2区を走るのは本校のエースです。『後輩の遅れた分を取り戻すぞ！』きっとそんな意気込みで出ていったことでしょう。『何とか、順位を上げて戻っててくれ！』祈るような気持ちで見守りました。やがて競技場の外から本校エースを応援する声が聞こえてきました。『もしや、1番で帰ってくるのか？！』期待を胸に待っていると先導自転車の後に現れたのは真っ赤のユニフォーム、紛れもなく本校の選手の姿でした。この時は鳥肌が立ちました。あとから出された記録を見たところ、2位に25秒差をつけた圧倒的な区間賞で、なんと10人抜きを演じた見事な走りでした。その後は後続の選手が1位の座を守り続けて圧巻の優勝劇でした。本当に素晴らしい、感動的な優勝レースでした。さあ、いよいよ次は最高で最終のステージ、全国大会ですね。

体調を万全に整えて悔いの残らないようなレースをしてほしいです。昨年度、4×100mRで全国優勝を果たしました。駅伝でも全国制覇をすれば本当に凄いことです。



2024. 11. 29. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』～For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『成道絵』

昨日の木曜日、京都府私立中学高等学校仏教青年会連盟（仏青連）の「成道会のつどい」を執り行いました。京都市には12校の仏教を教育の基盤にした私立学校がありますが、これらの学校が回り持ちで「仏青連のつどい」を開催しており、今年度は本校が当番校になっています。当番校になると、4月に行なった花まつり（「灌仏会（かんぶつえ）」のつどい）と1月末に行なう予定の「涅槃会（ねはんえ）のつどい」、今回の「成道絵（じょうどえ）」のつどい」を主催することになっています。



さて、これらの3つを「仏教の三大法会（ほうえ）」と呼んでいますが、せっかくの機会ですのでそれぞれの行事について簡単に説明しておきましょう。

「灌仏会」はお釈迦様のご誕生をお祝いする日で、「涅槃会」はお釈迦さまのご命日でそのご遺徳を忍ぶ日です。「成道会」ですが、これはお釈迦様が悟りを開かれた日とされており、改めてそのお教えについて考える日とされています。もう少し平たくいって、「私たちに仏教という贈りものをくださったお釈迦様に改めて感謝する日」といってもよいかと思います。

まだ少々難しいようなのでもっと別の具体的な言い方をします。

本校もそうですが、仏青連の加盟校はその教育の基盤が仏教精神です。しかし、普段の学校生活では多くの人がそれほどそのことを意識はしていないでしょう。一方、お盆やお彼岸などに家族や親戚が集まって楽しくご飯を食べたりお墓参りをしたりすることがあると思います。「成道会」は、こうした仏教に親しんだことを思い返してみる日だと考えるとよいかと思います。もっと言えば、亡くなった祖父母などの身近な方がおられたら、その方と楽しく過ごしたことを思い出してみるというのもよいかもしれません。「成道会」をそんな日にしてはどうでしょうか。

本校のつどいは生徒主体で行います。司会進行から献灯・献花、聖歌隊や吹奏楽部の演奏、他校からの参加者を会場まで誘導するに至るまですべてを生徒が行なうのです。もちろん先生の指導のもとに行ってはいるのですが、その様子は春の「灌仏会」のときから他校の関係者からもとても高い評価を頂いています。昨日も、全校生徒が参列する態度も含めてとても立派にやり遂げてくれ、指導をしてくれた教員と本校生徒のことを大変誇らしく感じたところです。

つどいの後半は法話です。今回は真宗仏光寺派大行寺のご住職、英月先生にお話をして頂きました。面白い話口調で語られる内容のなかで「お釈迦様が生きておられた2500年前のことは今の世の中のことと共有できる」「何があっても、あなたがあなた自身を諦めても、あなたを見捨てないのが阿弥陀様」など、深く心に残るお話を聴かせて頂きました。一旦立ち止まって自分を振り返ることのできたよい時間でした。

2024. 11. 22. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』～For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『読書のすすめ』

今週になって一気に朝晩の冷え込みが厳しくなってきました。昨日の朝はとうとうダウンジャケットを着用して朝の愛犬の散歩とバイクでの通勤をしました。寒い中を温かい格好で過ごすことに“小さな幸福”を感じるのは私だけではないと思うのですがどうでしょうか。

さて、季節が変わって過ごしやすくなることや夜の時間が長くなることで、秋はいろいろに形容されます。「食欲の秋」「スポーツの秋」「芸術の秋」「勉強の秋」etc…。その中でも「読書の秋」という言葉はよく耳にします。しかし、最近の世の中の状況を観ると「読書ばなれ」が激しいように感じます。そして、それは若者において特に顕著です。私が学生の頃までは、電車やバスの中で本や新聞、雑誌を読んでいる人がたくさんいました。しかし今、その姿を観ることはあまりありません。ほとんどの人がスマホの画面を見たり、それを触ったりしています。

スマホの使用が悪いと言いたい訳ではありません。ニュースが向こうから勝手に飛び込んできたり、インターネット機能を使って必要な情報がすぐにゲットできたりと、その使い方に長けていない私でも色々な面で随分と便利になったと思います。

しかし、私は人が、特に若者が活字から離れていいってよいと思ってはいません。

特に、中学生と高校生には強く読書を薦めます。本を読むことで、知らなかつたことに気が付けたりして教養を広め深められます。覚えるのとは異なつたかたちで自然に知識が身に付きます。文章を読んでいる中で無限に想像力が膨らみます。また、“読む力”がつくと、様々な表現方法に触れることで“書く力”もついてきます。

私も子どもの頃から親や先生から「本を読め」と言われて育ってきました。しかし、わんぱくで運動大好き少年だった私にはなかなかにそのハードルは高く、大学生になるまでは読書の習慣が身に付かずにいました。大学受験のとき、長文読解のある「現代国語」の試験が苦手で、『もっと本を読んでおけばよかった』と思ったものです。因みに、国語は、知識と演習の量で確実に点数がとれる古文と漢文で勝負しました(笑)。

大学生になり、時間に余裕ができたこともあって読書をするようになりました。小説が中心でしたが、読みだすとこれが面白く、夢中になって同じ作家の作品を次から次へと読み漁りました。『もう寝ないと…！』と思いながらも『もう1章だけ…！』と明け方まで読んだほどです。それは社会人になっても変わらず、今も常に鞄の中には文庫本をいれて時間があれば読めるようにしています。

教師を目指す大学生に講義をする場面があります。今の学生もあまり読書になじんではいないようです。一方で、発表力や文章力がある学生はよく本を読んでいるということは確かです。受験のためというより、人生を豊かにするためにも、是非本に親しんでほしいと思います。『読書の秋』を体感し、それを楽しんでみませんか。



2024. 11. 15. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』～For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『アッパレ！』

9・10日の両日、中学校と高等学校のソフトテニス部と、中学校陸上競技部の駅伝チームが見事に府大会優勝を果たしました。

高校ソフトテニス部は昨年度、決勝戦で敗れた悔しさを晴らす形での優勝です。一方、中学ソフトテニス部についてはもう10連覇以上していると思います。

どちらも京都府では『勝って当たり前！』と思われがちですが、この子たちの日々の努力は誰もが出来るものではありませんし、顧問の先生のご苦労も同様です。

私は常々他校の先生方に言っています。「彼女らは、毎日早朝から練習し、日が暮れても練習し、土曜・日曜は遠征と練習試合の繰り返しの日々を送りながら、勉強も頑張っている。しかも学級や学年のリーダーたちだ。だから応援したくなるし自慢の子たちだ」と。

そして、中学校の駅伝チーム。“All Japan Ekiden race”制覇に向けて、彼女らはその第2段階を見事にクリアしました。京都市大会に続いて京都府大会での優勝です。そして、これで全国大会出場の切符をつかみとりました。次は、昨年度優勝している12月1日の近畿大会、そして最終目標である12月15日の全国大会です。

今回の試合では、選手の全員が区間賞を獲得する快走を見せました。一度も1位の座を明け渡さない勝ち方を「完全優勝」と言いますが、全員が区間賞をとる勝ち方を表す言葉はないようです。それほど実現が難しいことをやってのけました。

1区の選手が競技場を出ていった後、しばらくして放送がありました。「只今、1位は京都御池中、2位は京都光華中です。」『2位か。頑張れよ！』そう思って待っていた所、先導バイクのうしろを颯爽と走ってきたのは本校の選手でした。あの時は鳥肌が立ったほどの感動を覚えました。その後は全員が快走を見せて圧巻の優勝でした。

「勝って兜の緒を締めよ！」まだ道半ば。全国大会優勝を目指して先は長いです。体調に留意してそれをゲットして下さい。それが選手のそして本校の誇りになります。



2024. 11. 7. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』～For the students～

京都光華中学校高等学校

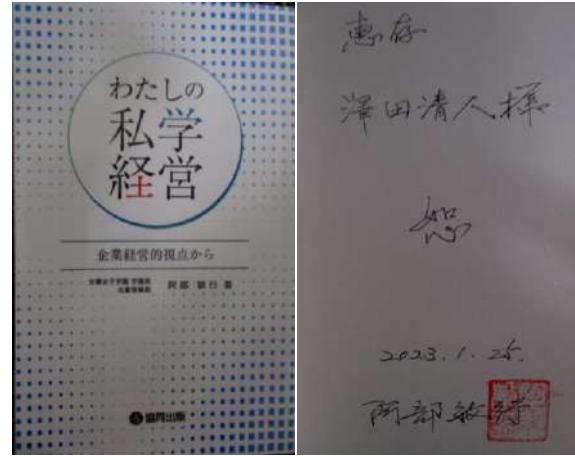
澤田 清人

『怒』

「怒る」一さて、何と読むでしょうか。
なかなか難しいですね。漢字検定で上級の人でも簡単には読めないかもしれません。

実はこの字、「おもいやる」と読みます。

光華女子学園前理事長、現学園長・阿部敏行先生に初めてお会いした日、表紙裏にこの文字を書いて『わたしの私学経営』というご著書を頂きました。その4月から本校の校長を勤めるというときでしたから、『次にお会いする日までには何が何でも…！』と思って読



みはじめました。読んでみるとこれがなかなかに興味深く、一気に最後まで読んだのを覚えています。そして、それ以後はこの本をいつも机の上に置いています。

さて、私にくださった「怒」(音読みでは“じょ”です)の文字の意味ですが、角川の国語辞典によると「①あわれむこと。あわれみ。②他人の気持ち・立場を推察し思いやること。思いやり。」とあります。学園長先生(私たち学園関係者は通常そう呼ばせて頂いています)は、その時『論語』の中にある内容を示しながら②の意味でお話してくださいました。このエッセイを書くにあたってもう少し調べてみると、「“許す”という意味をも内包した思いやり」のことのようです。

私立学校の校長として新しいスタートを切ろうとしている私に対して、大事にしてほしい心得として『怒』の文字をくださったのでした。一人ひとりの生徒に丁寧に寄り添い、その思いや願いをくみ取りながら大切に接していくかなければならない教師にとって最適の文字だと感じました。またこの時、「こうかの心」も学園長先生が考えられたということを知ったのですが、これとも上手く重なっているとも思ったものです。

11月4日、その学園長先生がお亡くなりになりました。あまりにも突然のことを受け入れがたく、連絡のメール文を何度も何度も読み直しました。かねてより体調を崩されていたことは存じておりましたが、弱音を吐かれることはませんでした。講堂で壇上から降りられる際にフラッとしたことがあります。お身体をお支えしようと手を伸ばしかけたところ、『必要なし！』と言わんばかりにそれを拒否されたことがあります。我々校園長は月に1度、学園長先生とも懇談の場を持ちます。そんな折、何度も慰められたり励まされたりもしました。私の亡くなった父よりは年下でいらっしゃいましたが、父と話しているかのような気持ちになったこともあります。いつだったか、早めに伺ったとき、池のほとりに立っておられてそこへ誘われました。

「澤田先生、見てみ。鯉が優雅に泳いどるやろ。あくせくしたらアカンで！」

先生から頂いた「怒」の心を忘れず、生徒に向き合い続けます。そして、先生のお考えを京都光華中学校高等学校に浸透させていきます。今後も見守っていてください。

2024. 11. 1. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』～For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『目標』

一気に朝夕の気温が低くなってしまった。今朝など、愛犬の散歩のため外に出た私は、思わずその寒さに身を縮めたほどです。一方、ようやくキンモクセイの強い香りが漂ってきました。これまで咲いていることは自分で認めてはいたものの、『今年のモクセイは香りが少ないなあ』と感じていたところです。おそらく、気温の低下によって



空気が澄んで、より遠くまで香りが漂ってきたのだろうと勝手に解釈しています。

さて、先週「Move！」が大成功の裡に終了しました。昨年度から感じていることです、この行事の異常なまでの盛り上がりのように嬉しく驚いています。生徒たちは各競技に夢中になります。いっさい手を抜くことなく全力を発揮します。思いっきり走り、跳び、投げます。その全力を尽くす姿に目を奪われどおしです。なかでもリレーの迫力は凄いです。陸上部の生徒を中心に運動部の子たちの走力は素晴らしい、女子だけなのにこれほど盛り上がるものだと感心させられています。

そしてメイン・イベントともいえるのが高校3年の創作ダンスです。

この日のために1学期から取り組んできています。前号にも書きましたが、ここまで来るまでに様々な出来事があったに違いありません。泣き、笑い、喜んだり悔しく思ったりの繰り返しの中で本番を迎えたことでしょう。本番は思い思いの衣装も相まってダンスが一層華やかに見えます。選手宣誓の中で代表の生徒がこう言いました。「これまで見る側でしたが、楽しみにしていたダンスを今年はいよいよ踊れます！」本音が出ていると、力強い宣誓の中でもこの部分が特に強く印象に残っています。

「Move！」の翌週の月曜日、クラスのリーダー格となって頑張っていた生徒と校内で会いました。「ダンス、よく頑張っていたね」「先生、何か次の行事が欲しいです。」「どういうこと？」「だって、目標がなくなって面白くないんやもん」

といえば、この生徒をはじめ少なくない生徒が“抜け殻”的になっているのを感じました。これまで「Move!」に向けて全力で取り組んできた生徒にとっては、それが終わったとたん、次への切り替えが難しいのも理解はできます。

生徒との会話の最後には次のように言いました。「次は、勉強、がんばれ！」

今振り返ってみると、勉強を頑張るというのは高校3年生にとっては当たり前すぎて、すぐに全力を注ぎこむ対象にはならないのかもしれない感じています。

人には頑張るべき「目標」が必要なのだと、その子と話したことをきっかけに再認識しています。私の、本校の、本校生徒の、生徒の保護者の方の、教職員の…それらが目指すべき目標は何でしょうか。それをしっかりと見極め、その実現に向けて全力を尽くすことこそが人生を豊かにし、有意義な時間を過ごすことに繋がるのだと思います。「目標がなくなって面白くないんやもん」その言葉が何度も思い出されます。

2024. 10. 25. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』～For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『躍動力』

若い身体が躍動しています。その姿を羨ましく、そして眩しく見ています。今週に入つてからは、校長室でジッと仕事をしていることが難しかったほどです。グランドから歓声が上ります。大音量でダンス・ミュージックがかかります。窓の外を見ると、生徒たちがリレーに興じていたり高校3年生がクラス



単位で創作ダンスを踊っていました。女の子ばかりだからなのか、元来そういう生徒たちだからなのか、とにかく中学生も高校生も「Move！」に向けて“全力で”取り組んでいます。そして、その表情が何とも言えず楽しそうで魅力的です。

学校行事の中で、「全力で走る」、「全力で競技する」、「全力で踊る」、そして「全力で楽しむ」など、こんなことはひょっとしたら高校生の時が最後かもしれません。私に関して言えば、大学生のときに「体育大会」があったのかどうかも知りません。学生の人数は高校と比べるとはるかに多く、学生全部が集まって「体育大会」が実施できたとは到底思えません。（一方で「大学祭」はありました。演劇をしたり模擬店を出したりした懐かしい良い思い出は今も心に残っています。）

本校の生徒たちは、「Move！」（体育祭）に全力を尽くし、思いっきり楽しんでいます。この姿を多くの人に見てもらいたいと思います。特に、高校3年生のダンスは特別です。体育の時間の中で1学期から取り組んできたものです。曲選び・振付・構成・演出 etc、中心になって頑張る人、それを支える人、皆に遅れまいと頑張る人たち、長い時間をかけ、時には揉めることもありながらも取り組んできたに違いありません。それを本番のたった10分ほどの時間の中で出し切るのです。本校の取組のなかで、これほどの時間と労力とを掛けて取り組むものは他にありません。体育の時間のことですが、学級という集団作りにつながるのは当然です。何年か先、高校時代の思い出として「Move！」の時のダンス」と答える人がいるに違いありません。

昨日までの練習、そして今日の本番を観ていて、どうしてもそちらへ視線が向く生徒がいます。この取組の中でこそ主人公になる生徒です。どの学級にもいます。その姿と表情は躍動しキラキラと輝いています。こんな取組が他にあるでしょうか。だからこそ「行事」は大切です。生徒を輝かせ、人間関係の難しさと大切さを学ばせ、団結の意味と意義を教えられるのです。本当に素晴らしい学びの場です。

保護者の皆様、楽しんでいただけたでしょうか。この「Move！」は私が親なら絶対に見たい行事です。我が子がイキイキと頑張る姿を観るのは親の最高の喜びです。

若い子たちの躍動する姿にエネルギーをもらうとともに、これからの時代へ向けた希望をもらった気がします。生徒の皆さん、お疲れ様でした。そして、大人を代表して一言お礼を言わせてください。「いいものを見せてもらってありがとう！」

2024. 10. 17. (THU).

校長室の窓から

『この子らと共に』～For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『目指せ 日本一！』

朝夕は幾分か涼しくなったものの、『いったいいつまで夏が続くのか！』と思うほど今年の日中の気温は高いです。5月からクールビズで過ごしてきましたが、気が付けばもう半年ほどスーツを来ていません。おそらくもうすぐ『寒い、さむい！』と言うようになるのだろうと思うと、『日本の四季はどこへいったのか』と思わざるを得ません。

さて12日（土）、中学校の駅伝競走の京都市大会が行われました。当日は幼稚園の運動会と重なり、運動会参観を途中で抜けて応援に行きました。

メンバーの一人が、この大会直後に行われるジュニア・オリンピックに出場するため、その選手に替わって1年生が抜擢され3区を任せられました。

花の1区を走るのは3年生。強豪ぞろいの1区を3位で次のランナーにタスキをつなぎました、2区を走るのも3年生。昨年度からメンバー入りし、去年の京都府大会では一時1位に迫る快走を見せた選手です。2区も速いランナーが多く、いい走りをしたにもかかわらず順位を上げることは叶いませんでした。さあ、いよいよ1年生が走る3区にタスキが渡りました。

勢いよく出ていった1年生ですが、思った以上の快走を見せます。足取りは軽く、まるで飛びるように走っていきます。なんと1人を抜いて2位で戻ってきました。

4区は本校のエースが任せられました。いつもは1区を走り、トップ争いをします。今回のように前を走るランナーの背中を追いかけるのは初めてかもしれません。おそらく、前のランナーの背中が徐々に大きくなってくること、抜いて置き去りにすることは初めての快感だったでしょう。最終5区を任せられたのは2年生。新エースです。先輩から繋げられたタスキを大事にゴールを目指します。『2位の選手に抜き返されるのではないか？』という不安は本人ももっていたと思いますが、軽快で力強い走りで見事に走り切りました。ゴールテープを切った瞬間の笑顔が何とも言えず素敵でした。

大会新記録での優勝というおまけ付きでした。さあ、次は京都府大会です。この大会で1位にならないと全国大会へ出場することはできません。

今年のチームは全国大会での優勝を目指しています。実は昨年度、京都府大会で2位になって全国大会へ出場することができませんでした。その悔しさを近畿大会優勝という形ではらした彼女らです。昨年度のメンバーがそのまま残っています。

今後、このエッセイで彼女らの全国大会への道（Road to all Japan Ekiden race）を特集します。目指せ、全国優勝！ “You can do it.” 「君たちならできる！」



2024. 10. 10. (THU).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ~ For the students ~

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『健康が一番！』

私ごとで恐縮です。8月18日までは元気そのものでした。その日は個人的な研究会の日で、朝から一日中、大阪で研究活動に勤しんでいました。研究会と言えばその後の懇親会が楽しみです。このときも旧知の仲間と楽しく語り合い、取組を交換し合いました。



おおきに祭で吹奏楽部とマツケンサンバ

ところがその翌朝です。起きるのがしんどく『一体どうしたんや?』との思いで学校へ来ました。それからは常に身体がだるく、何とも言えない倦怠感に悩まされます。驚くほど汗をかき、朝には発熱もありました。声がかかるて人前で話をする際には悩みました。実は、上の写真の頃が一番しんどかったのです。かかりつけのクリニックへ行くと、まずはコロナの検査を受けました。「陰性」ということで別の原因を探るため血液検査です。一週間後にクリニックへ行くと、何と「甲状腺機能亢進症」という病気であることが分かりました。

これは甲状腺ホルモンが出過ぎる病気です。この病気に罹ると次のような症状が出ます。心拍数と血圧の上昇、不整脈、過剰な発汗、神経質や不安、睡眠障害、意図しない体重減少、排便回数の増加などです。実際、普通に日常生活を送っているだけでもマラソンをしているような疲れようでした。食欲が減退し、体重もあっという間に5kgほど落ちました。健康的に痩せたのなら喜ばしいことですが、今回は病的な痩せ方（やつれ方）なのでちっとも嬉しくはありません。いろいろな人から「痩せたんとちゃう?」と言われることがショックでした。人々に会った人の会話の場面では、「どうしたん?えらい痩せて」と言われる前に病気のことを打ち明けるようにしました。

ところで、病気になって改めて健康の有難さに気が付きました。これまで何度も感じたことではあります、今回はしんどい状態の長さから特に強く感じています。

健康なときはそれが当たり前で、その価値には無頓着なのですが、それを失ってはじめてその有難さ、素晴らしさに気づけるものです。今は、グランド等で元気よく活動する中高生を観ては羨ましく眩しく感じているところです。

しかし、このまま老けてしまうことは絶対に避けなければなりません。病気が分かった頃は、高校2年生たちと一緒に研修旅行に行くことさえも不安に思っていましたが、ドクターには「必ず元通り活動できるようになる!」と言われ、希望を持たせてもらっています。今も薬による治療を続けており、身体は随分と楽になりました。

元気が取り柄の私です。またすぐに皆さんと一緒に楽しく笑い合い、大きな声でおしゃべりします。生徒や保護者の皆さんも、健康の有難さについて今一度考え直してみてほしいと思います。それは失ってはじめて気づくものですから。

2024. 10. 7. (MON).

校長室の窓から

『この子らと共に』～For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『何ともステキな時間』

10月1日（火）の午後、伝統文化学習発表会を行いました。日頃の伝統文化の授業の成果を発表するという行事です。

各授業を選択している生徒の代表者が講堂の舞台で練習してきた腕前を披露し合いました。約2時間の発表会でしたが、あつと言う間に時間が経ったように思います。それには、幕間の時間に工夫が凝らされていました。舞台上の代表生徒たちが“ど真剣”に演技や手前を披露し、その緊張感が客席にまで伝わってきていたからだと思います。

保護者の方も多数お越しになりました。

写真にはあげていませんが、自分で和服の帯を結ぶというパフォーマンスを見せてくれた人たちもいました。親世代でも着物を自分で着られる人は少ないと思われるなか、日本舞踊や茶道や華道・書道を披露してくれた人たちと併せて『自分の娘がこれほどまでにできるとは！』と嬉しい驚きを感じおられたのではないでしょうか。

和歌を学習している人たちは「披講（ひこう）」を披露しました。披講とは、詩歌などの会で詩歌を読み上げることですが、独特の節回しで読み上げる様子は、その伝統的な所作を併せて平安の時代にタイムスリップしたかのような気持ちになりました。

生徒がこれほどまで立派な姿を見せてくれた背景には、もちろん伝統文化の授業を支えてくださっている先生方のお力があることは確かです。生徒たちを技術面だけでなく、心が豊かに成長することを支援していただき衷心よりお礼申し上げます。

また、本会の運営に携わってくださった先生方も、本当に有難うございました。



2024. 9. 27. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ~ For the students ~

京都光華中学校高等学校
澤田 清人

『乗り越えろ！』

毎朝5時30分に起きますが、最近はまだ暗いです。また、虫の声がにぎやかに聞こえており、季節が確実に進行していることを実感します。そういえば、いつの間にか日が暮れるのも早くなり、グランドの部活動も暗い中でやるようになりました。

「おおきに祭」から3週間が経ちました。あの楽しかった記憶と興奮も、もう随分と前のことのように思います。一方で、今週に入ってからはグランドの体育の授業に変化が見えてきました。大縄跳びや大竹をもっての走り、リレーや光華音頭の練習など、確実に『Move!』に向けての取組が行われています。生徒たちも実に楽しそうに一生懸命に取り組んでいます。いい加減な態度で臨んでいる生徒がいないので、観ていってとても気持ちよく面白いです。生徒たちの歓声が上がると、カメラを片手に校長室から飛び出しが何度もありました。待機の生徒にカメラを向けてもさわやかな笑顔を見せてくれます。本当に可愛く素敵なお生徒たちです。

特に高校3年生たちは、学級ごとに「Move!」の当日に披露するダンスを創作し、その練習に余念がありません。学級で一つのものを作り上げる際、生徒同士がぶつかることもあります。私は長く中学校の教師をしてきましたが、合唱コンクールの取組では一生懸命な女子といい加減な取り組み方しかできない男子との間でよくトラブルが起こりました。時には女子が泣き出して合唱練習どころではなくなったりしました。しかし、そんなトラブルを乗り越えて本番の成功を迎えるからこそ大きな感動があったりもしました。学校は集団で生活するところです。人が集まって夫々が自己主張をすればトラブルが発生します。トラブルとは生徒同士がぶつかり合って起るので、そこに“熱”が発生します。最近は、生徒がぶつかりを避けて、言いたいことを言わないようにする傾向があるようですが、それでは“熱”は生まれません。

もちろんトラブルなど、ない方がよいに決まっており、みんなが相手のことを尊重しての言動ができればそれが一番です。しかし、トラブルを恐れて中途半端な取り組み方をしていては満足いく結果に繋がらないこともあります。

近頃の生徒の様子を観ていると、生徒間トラブルの乗り越え方が上手くないよう思う場面が少なくありません。少々乱暴な言い方をしますが、「トラブル大いに結構」、「揉めてもいいじゃないですか」。トラブルから学ぶことも大事です。大人になって社会に出て、人間関係で苦しむことはしょうちゅうあります。そんなときのための練習を生徒時代に学校でするのだと思ってほしいです。トラブルで“熱”を起こし、それを乗り越えた後に結果が固まるという経験を怖れずにしてほしいと思います。



2024. 9. 19. (THU).

校長室の窓から

『この子らと共に』～For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『意地』

14日（土）、中学校の陸上競技大会新人戦が行われました。夏の大会をもって3年生が引退し、2・1年生中心で新たなスタートを切る大会の到来です。『やっと自分たちの時代が来た。やったるで！』そんな気持ちと共に、どの学校でも、そしてどの競技でも2・1年生はこの新人戦に気合を入れています。しかし、本校の陸上競技部とソフトテニス部の選手にとっては少々複雑な気持ちがあるはずです。

そう、引退した3年生が凄すぎたからです。

陸上競技部で言えば、先輩はこれまでいくつかの種目で大会新記録を出しました。数人が全国大会に出場し、そこで3位に入った選手もいました。京都市や京都府ではぶっちぎりの、そして近畿大会でも堂々の総合優勝を果たしました。一方、ソフトテニス部は全国優勝を果たしました。いわば日本一強い先輩の後を継ぐことになるのです。これにプレッシャーを感じない訳がありません。14日、陸上競技部の選手たちは相当な重圧を感じながら試合に臨んだはずです。京都一幸せで京都一しんどい選手たちです。

なかなか思うような結果が得られないなかで、1500mと100mHでは優勝しました。しかも100mHでは1・2フィニッシュです。200mと走り幅跳びでは3位、本校の看板である4×100mRでは2位に入り見事に総合優勝を勝ち取りました。総合得点が100点を超えるようなこれまでの優勝とは異なるものの、十分に京都光華中学校陸上競技部の存在をアピールし、面目を保ったかたちになりました。

「意地っ張り」「意地汚い」など、「意地」という言葉はマイナスイメージをもって使われることが多いように思います。しかし今回ことでは、立派に「意地」を見せたといってよいかと思います。

翌週、校内で陸上競技部の新キャプテンに出会いました。「土曜日はよう頑張ったな！」と声を掛けた瞬間、彼女の変化に気が付きました。200mの選手である彼女は、一つに束ねた長い髪をなびかせながら走る姿が印象的な選手でしたが、その髪が短くカットされているではありませんか。「あれっ、ひょっとしてその髪…」と言いかけた瞬間、「はい。土曜日の試合に負けたことが悔しくて切りました。次は勝ちます。」と堂々とした態度できっぱりとそう答えました。ここにも彼女の「意地」を見た気がして、とてもよい気分になりました。

ソフトテニス部の試合も本格的に始まっています。先輩に追いつけるか、追い越せるかは分かりませんが、その気持ちを強く持って「意地」を見せて戦ってほしいです。いま、「意地を張る」って、決してマイナスの言葉ではないと思い直しています。



2024. 9. 12. (THU).

校長室の窓から

『この子らと共に』～For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『夢のような2日 おおきに祭』

先週末の6日（金）と7日（土）の2日間、「おおきに祭」を行いました。1年は合唱、2年は演劇、3年は模擬店と、一応はそう決められています。ところが、生徒たちが自主的に内容を決めていくと、どうしてもダンスやお笑いが入ってきます。そして、どの舞台もよく工夫がされていて面白く、登場している生徒たちはもちろん、観ている方も十分に楽しめました。

今年度は、台風の影響で練習日が少なくなりました。そのような中で、よくこれだけの作品が作れたものだと感心させられました。いくつかの模擬店にも顔を出しましたが、こちらもどれもよく工夫されていて、来ていただいた人を十分に満足させるだろう内容になっていました。高校3年がつくった“お化け屋敷”は特に面白かったです。小学生の低学年の児童なら怖くて泣いてしまうのではないかと思ったくらいです。

これらの舞台や模擬店を創るうえで、担任の先生はどのくらい関わっているのでしょうか。自分が高校生の頃なら先生の関りはほとんどなかったと記憶しています。私は中学校の教師をしてきましたので、どうしてもその感覚で判断してしまいます。本校では、高校生の取り組み方が中学生にも伝わり、私が思っているよりもずっと自主的な活動になっているのだと思います。それにしても、中高生の独創性と感性のすばらしさに感心させられっぱなしでした。

2日目の部活動の発表会にも触れなければなりません。軽音楽部やバトントワリング部、ダンス部などは、これが高校3年生の引退舞台になるそうです。それらが始まるころになると、次第に講堂に人が集まり出してきました。3年生の最後の姿を観ようと、そして激励しようと仲間たちが集まってくるのです。このことも大変好感をもって見ていました。また、吹奏楽部の発表では、私が今年も歌わせてもらいました。歌詞を間違えたりもしましたが、観客の皆様を楽しませることができたのではないかと密に喜んでいます。

「おおきに祭」の2日間は、将に夢のようでした。



2024. 9. 4. (WED).

校長室の窓から

『この子らと共に』～For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『いのち』

8月28日に本校生徒の一つの大切な『いのち』が絶えました。翌朝、保護者の方からの知らせで教職員一同、大変驚くとともに悲しみにくれました。そして、このことをどのように生徒に知らせるかを検討しました。同じ学級や学年、中学校の頃からの友人、部活動の関係者等、関係の深い生徒たちだけを集めて伝えようかという案もありましたが、最終的には臨時の全校集会をすることにしました。



その集会での冒頭のことばを以下に記します。

「この生徒については知らない人も少なくないとは思いますが、本校の大切な生徒の一人ですから、こうして全校集会を開くことにしました。どうぞ、“我がこと”としてしっかり聴いてほしいと思います。」

全校生徒は、誰一人ピクリとも動かず集中して私の話を聴いていましたが、そのうち、講堂の各所からすすり泣きの声が聞こえ始めてきました。

本日、告別式が終わったので、ここに追悼の意味も込めて彼女のことを綴ります。

この生徒は、幼稚園から京都光華で過ごしてこられました。中学校入学後は陸上部に入って活発に活動していました。中学2年生の時に突然発病され、その後は闘病生活に入れられます。厳しい闘病生活を見事に乗り切られ、中学3年の3学期から登校されるようになりました。そして、卒業式に私は彼女に卒業証書を手渡すことができました。両脚に力を込めて階段を上られる姿や楽しそうに授業を受けられる姿が思い出されます。ところが、高校生になって病気が再発し、入院闘病生活に戻られました。懸命に生きようと努力しておられたのですが、8月28日ついに命尽きられました。

彼女というと、思い出すことがあります。昨年度の3学期の始業式でも話したのですが、特に印象深く、深く考えさせられる内容なので改めて書きたいと思います。

本校では、高校進学に当たって、内部進学生に面接行っています。彼女の面接を私が担当しました。彼女の面接は特別に3学期が始まる直前の冬休みに行いました。彼女は面接が始まったときからずっと泣いていました。「どうして泣いているの？」と問うた私に彼女は次のように答えたのです。「こうして学校に通えることが嬉しくて…」

昨日の通夜式と今日の告別式にはたくさんの、本当にたくさんの友人や関係者が彼女との“最後のお別れ”的に集まっていました。式の進行の方やお導師様のお話のたびに生前の彼女の様子が思い出され、あちらこちらから嗚咽が聞こえます。若い人とのお別れの式は特別な悲しみがあるものです。高校1年生での死は早すぎます。学校に通うことが大好きだった彼女は、とても無念に感じていることでしょう。

彼女のご冥福をお祈りします。また、残された人たちに『いのち』について、また自分自身の生き方について、改めて考え方を改めて考え直す機会を与えてくれたことに感謝します。

2024. 8. 28. (WED).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ~ For the students ~

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『2学期スタート』

24日(土)に第2学期がスタートして4日目となりました。今回のエッセイではこの4日間のことから3つを取り上げて綴ります。

1つ目はもちろん始業式のことです。

今回は学習について話しました。何といっても、今学期には高校3年生の進路がほとんど決まります。高3生にとっては思いっきり勉強しなくてはならない時期です。一方、「おおきに祭」や「Move!」など学校行事もたくさんあるのが今学期の特徴です。私自身の高校生の頃の経験を伝えながら勉強と各行事を両立して頑張ってほしいと伝えました。

その後は恒例の生徒の出番です。生徒たちは自分の言葉で今の思いをしっかりと述べました。高3生からは「勉強もしっかりと頑張りたい」という力強い言葉も聴けました。皆さんの活躍が楽しみです。

2つ目は、昨27日に高校2年生たちと行った「宝塚歌劇の鑑賞会」です。毎年、本校の卒業生が出演するステージを選んで鑑賞会を企画しています。今回の演目は「記憶にございません！」。三谷幸喜監督で映画化もされたコメディタッチの作品です。高校生にも分かりやすく、政治について考えさせられるところもあったように思います。卒業生の瑠璃花夏(るりはなか)さんは重要な役どころで大活躍でした。あんなに華やかな世界で活躍する先輩の姿 ※写真は京都新聞電子版よりを観ること、そして本格的なミュージカルに触れることが高校生の間に経験出来て生徒たちは幸せだと思います。実際、上演中の集中ぶりは凄かったです。

3つ目は今日(28日)の京都新聞に掲載されていた記事からです。本校の中3年生が駅のホームから転落した高齢女性を抱え上げて助けたという内容です。近くにおられた会社員の女性2人が非常ボタンを押して電車が停車したのを確認して線路に降り、抱え上げて救助したというニュースです。今月11日の出来事で、その後何度も話をしていたのに、彼女はこのことについては全く触れませんでした。おそらく、彼女にとっては特別なことをしたという意識はなく、ごく当たり前に人助けをしたのだと思います。「人を助けられたのが一番良かった。」というコメントも素敵でした。

新聞記事の中には次のような記述もあり、期せずして彼女と本校のPRにもなりました(笑)。「今年の全国中学校体育大会の100m決勝で3位に入賞した有力選手。」



2024. 8. 23. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ~ For the students ~

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『覚悟』

明日から2学期が始まります。2学期は授業日数が一番多く、「おおきに祭」や「Move！」、高校2年には研修旅行などの大きな行事があり、高校3年生のほとんどが進路を決定します。そういう意味では、「忙しいけれども、最もやりがいのある学期」だと言ってもよいかと思います。

目の前の一つひとつのことにも全力で向き合い、よい思い出をつくると共に、楽しみながら頭と心とを鍛えてほしいと思います。

さて昨晩、“超ビッグ・ニュース”が飛び込んできました。中学校のソフトテニス部が全国中学校ソフトテニス大会団体戦の部でなんと優勝を果たしたのです。私が京都府中学校体育連盟ソフトテニス専門部長をしてから15年前の全国京都大会の時、京都光華中学校は準優勝しました。当時は本校の校長ではなかったのですが、選手や保護者の方と一緒に大きな声で応援したことを思い出します。

昨日は何度もHPをみて試合の進行状況を確認しました。午後5時頃からHPが全く更新されずヤキモキしていたところ、8時過ぎに顧問の先生から「優勝」の知らせを受けたのです。決勝の相手はこれまで何度も戦い、その度に悔しい思いをさせられてきた大阪府の私立学校です。見事にリベンジを果たしました。本当におめでとう！

近畿大会で全国大会への切符をゲットした時、それまで調子の出なかつたペアの活躍がありました。今回も結果的にそのペアが1対1の場面でチームの勝敗を決する試合を戦うことになりました。近畿大会の時を思い出します。それまで十分に力を発揮することができず、消極的に自信なさげに戦ってきた彼らが見違えるような戦いぶりを見せました。おそらく『このままじゃ、これまでやってきたことに意味がなくなる。自分の力を出し切ろう！思い切っていくぞ！』そう思ったのでしょう。それまでの試合と全く違っていました。将に『覚悟を決めて』戦っていることを感じました。

優勝を決めたペアは、あの試合に勝利し、本来の自分の姿や自分の戦い方を思い出したのだと思います。優勝を決めた瞬間の動画（よく撮っていたものです）も送られてきたので何度も観ましたが、とっても良い表情で戦っていました。

人には、「覚悟を決めて」あるいは、「覚悟をもって」臨む場面が必要です。私も何度もかはそんな場面に出会ってきました。ですから、分かってはいたものの、具体的なシーンを見たのは本当に久しぶりで、それこそ清々しい気分でした。

2学期を迎える生徒の皆さん、明日からの学校生活や家庭生活で会うだろう事ごとに真正面から向き合い、思いっきりぶつかっていってほしいと思います。そして、“こそ”という時には覚悟を決めて行動してほしいです。受験勉強か、部活動か、あるいは学校生活の何気ない場面かもしれません、きっとそんな場面が訪れると思います。



2024. 8. 2. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』～For the students～

京都光華中学校高等学校
澤田 清人

『わたしの今』

夏休みが12日間過ぎ、早くも8月に入りました。この間にも生徒達が様々な場面で活躍してくれました。

まずは高校ソフトテニス部のインターハイです。団体戦でも個人戦でもベスト8(5位)入賞です。ベスト8という結果は本校の選手にとっては少々物足りない気もしますが、一般的にはとても立派な結果です。特に個人戦でベスト8に入ったペアがいると、来年度の出場枠が8ペア確保できるので、後輩たちにも大きなプレゼントができました。



次に中学校のソフトテニスです。現在は府大会まで終わりました。全国大会出場と願わくはその優勝を目指す選手たちにとっては先が長いですが、市大会・府大会ともに団体戦優勝、個人戦ベスト4独占という結果をみれば、ここまで順調だといってよいでしょう。近畿大会へは団体と個人の7ペアが出場し全国大会を目指します。

また中学校の陸上競技です。中学陸上では近畿大会の結果を待たずに全国大会への切符を獲得している選手たちがいます。100m・100mH・1500m・4×100mRです。全国大会での活躍を期待しつつもまずは近畿大会での活躍を望みます。近畿大会にはこれらの他に200mと走り幅跳び、円盤投げ、1年100mと800mの選手も出場します。近畿大会での2年連続総合優勝を目指して頑張ってほしいです。

最後に華道部の生徒が出場した「花の甲子園」大会を紹介します。全国大会へとつながる近畿の予選大会です。3人一組で出場したその大会の今年のテーマが「わたしの今」だったそうです。顧問の先生から大会翌日に次のようなメールをもらいました。

近畿地区大会は「わたしの今」というテーマでした。高1の小寺さんは、過去から現在、未来の自分に見立てた花材を後ろから前に向かって順番に生ける方法で「過去があるから今の自分がある、今があるから未来がある」という思いを表現しました。高3の東野さんはアイデア自由花というジャンルを担当し、自分で自由に花器を設定できるため大中小の器で過去・現在・未来の自分を表しました。また、1種類だけ好きな花材を持ち込むことができるので、「今この瞬間を生きる」という花言葉を持つオレンジのバラを使いました。銀色の丸い枠は自分の限界を表し、枝を突き抜けさせることで今の自分を越えるという意味も込めました。クレシさんは、ひまわりとその後ろの葉で未来への希望の強さを、赤い実で今の努力が実を結ぶことへの期待を、黄色のふわっとした花で未来への不安を表しました。それぞれの思いが作品にもプレゼンにもあふれています。予想していた花材がないものもありましたが、アドバイスしあいながら協力してきていたので、充実した大会になったのではないかと思います。

「今この瞬間を生きる」とは、昨年度の夏休み明けに全校集会で生徒たちに向けて強く語った内容です。それを意識してくれていたのなら嬉しいです。あと3週間の夏休み、生徒たちがどのように「今」という瞬間を生きるのか、楽しみでなりません。それぞれの夢に向かって精一杯楽しんで、精一杯成長してほしいと思います。

2024. 7. 26. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ~ For the students ~

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『攻撃的なねばり』

19日、1学期の終業式を終えました。今年の終業式も生徒たちを中心に据えたものにできたと思っています。今回も私が話し終えた後、数人の生徒が壇上に上がって感想や決意を述べてくれました。なかには毎回のように登壇してくる生徒もいるのですが、回を経るごとにその発言内容が確実に高まっているのが分かります。

さて、終業式の前後から部活動の夏の大会が始まっています。生徒の頑張っている姿を見るのは楽しく、日程を調整してできるだけ多くの試合の応援に行くようにしてきました。今回は、中学校と高等学校のソフトテニスの試合を観戦して思ったことを綴ります。

近畿大会の準決勝以上のレベルともなると技術的な差は実はあまりありません。ちょっとしたミスでながれを掴んだり手放してしまったりするものです。そのミスというのも、ほんの数センチ単位のもので、初心者やその競技に携わっていない人には分からない程度のものかもしれません。具体的に言うと、数センチ単位のロブの高さやストロークのコースや長さのことです。その狂いによって相手に攻撃を許したり得点を許したりして窮地に陥ってしまいます。そこで、選手たちはボールを打つ際には細心の注意を払って配球したり強打したりを繰り返します。そうして観戦していると、試合が決勝戦に近くなるほど息が詰まりそうです。

ところで、あらゆる競技をする上で「ねばる」という言葉があります。この言葉から連想するのは往々にして「防御」かもしれません。しかし、先日から選手たちのプレーする姿を見ながら『そうじゃないな！』と思いました。数センチ単位のミスもないよう細心の注意を払いながらも攻撃し続ける「ねばり」です。このすさまじく忍耐力（精神力）と体力を要する「ねばり」こそが「攻撃的なねばり」で、厳しい勝負をする上での必要性を強く感じました。

この「攻撃的なねばり」はスポーツ以外、例えば勉強にも言えるのではないかと思う。勉強は最終的には自分一人でするものだと思います。勉強のやり方や教材、きっかけなどは先生から教わるのかもしれません。でも、いつまでも言われたことだけをやっていては本当の実力はつきません。自分に合った勉強の仕方を見つけ、自分で設定した目標に向けてコツコツとねばり強く取り組む以外に力をつける方法はないのです。将に「攻撃的なねばり」です。この機会に身の周りにあるはずの「攻撃的なねばり」を見つけ、それに対する自分の取り組み方を見つめ直してほしいと思います。



2024. 7. 17. (WED).

校長室の窓から

『この子らと共に』～For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『夏休みを前に』

今週末（19日）をもって1学期が終わります。こうして振り返ってみると「アッという間」だったなあと思います。そして、夏休みになると部活動をはじめとして様々な行事があります。また、多くの部の場合は今夏をもって3年生が引退をすることになると思います。これまで一緒にやってきた先輩との最後の場面だからこそ、夏の試合やコンクールには思いが込められます。

先日、一足早く和太鼓部が定期演奏会の中で卒部式を行いました。一人ひとりの3年生に向けて後輩からメッセージと花束が贈られました。先輩との思い出が熱いものとなってこみあげてくるのでしょうか、嗚咽しながらメッセージを贈る人が何人もいました。卒部する3年生の方も、キャプテンが後輩や保護者、先生方へメッセージを贈ります。感謝の言葉を中心に後輩へは激励と「しっかり後を継いでほしい」という願いが伝えられました。「授業が終わるとできるだけ早く光風館のエレベーター前に集まって部活動の準備をしたこと、もうそんな毎日がないのかと思うと寂しい。」と語った言葉が特に強く印象に残っています。

夏休みを前にして、このほかにも2つのビッグニュースが飛び込んできました。

中学3年生がマレーシアのカンパーで行われたアジアトライアスロンジュニアカップ（2024/カンパー）で見事に優勝を果たしてアジアチャンピオンになりました。“U15女子の部”に出場した彼女はスイムー375m、バイクー10km、ランー1.25kmを36分53秒で、2位の選手に1分近い差をつけてゴールインしました。最も過酷で鉄人レースといわれる種目です。いずれオリンピックに出場してほしいと思います。また、高校ソフトテニス部が、団体戦で近畿大会優勝を果たしました。昔から「近畿を制する者は全国を制する」と言われるくらいに近畿のレベルは高く、優勝は難しいのです。実際に、京都府の高校（これも本校だと思います）が優勝したのは20年くらい前だと思います。決勝戦は、個人戦でも決勝戦を戦った大阪府の昇陽高校でした。個人戦で優勝したペアには本校のペアが4つもやられただけに何としても勝ちたかったはずです。決勝戦は2-0で勝利し、見事に個人戦の借りを返しました。

さて、生徒の皆さんには今年の夏休みにどんなドラマを見させてくれるのでしょうか。

部活動だけを取り上げるつもりはありません。夏休みの時期にこそ勉強に力を注ぐ人もいるはずです。一人ひとりが自分の目指す目標に向けて精一杯取り組んでください。結果がどうであれ、その姿は美しく、皆さんを大きく成長させてくれます。



2024. 7. 12. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』～For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『中学・高校という時期』

今週は雨の日が多いです。期末テストが終わって1学期も残りわずか、夏期選手権大会に向けて部活動の練習に力を入れたいところですがこの天候ではそもそもいきません。選手の皆さんはイライラした気持ちでいるのかもしれません。でも、この状況は対戦相手も同じ。その中でどれだけのことができるのか、そこが問われることになりそうです。

さて、今日は中学校教育と高等学校教育、つまり「中等教育」の時期とその意味について、私が普段考えていることを述べたいと思います。

一般的に教育は、大きく次の4つ、「就学前教育」・「初等教育」・「中等教育」・「高等教育」に分けられます。就学前教育は幼稚園教育をはじめとする小学校入学前の教育のこと、初等教育は小学校6年間の教育、そして高等教育は大学・大学院教育のことです。多くの人が大学進学をするという昨今の状況から「高等教育」という言い方に若干の“違和感”がなくはありませんが、この言葉が終戦後間もない頃の教育改革の際に確立されたことを思えば納得させられもします。当時は大学に進学をして学問を究めようとする人の割合は極めて低く、一般には“エリート”だと考えられていたからです。ところで「中等教育」ですが、それは「前期中等教育」と「後期中等教育」とに分けられます。前期が中学校教育で、後期のそれが高等学校教育であることはわざわざここに書くまでもないことかもしれません。

そもそも小学校から中学校、そして高等学校まで教育は繋がっており、内容は徐々に高度になっていくものの、実は同じようなことを繰り返し学習します。それが顕著に表れるのが中学校と高等学校との関係です。高校生のみなさんの中には、『この勉強、中学校の時にやったやん！』と思ったことがある人がきっといることでしょう。

今日の本題です。中等教育までと高等教育との一番の違いは学習（学び方を含む）の自由度だと思います。小学校・中学・高校へと進級していく過程でもこのことを経験しているはずですが、大学へ行くと高校までとは大きく異なり授業科目まで自分で選ぶことになります。時間割が人によって異なったりもします。それまでのようになどと担任の先生から「いついつまでに〇〇のことをするように！」などと言われることもなくなります。別の言い方をすると、先生の指示を受けて行動するのは高校時代が最後だということになります。大学生に成ったら、「勉強しなさい」ということは先生からも親からも一気に言われなくなるものです。一方で、中学生高校生の頃は大学合格という目標に向けて、生涯で最も勉強する時期でもあるからこそ主体的に学習し、何事も自分で決めて行動する“大人”になる準備の最終段階の時期だともいえるのです。

中高の6年間、特に高校の3年間なんて100歳時代と言われる生涯からすればあっという間です。でも、この時期のことは一生思い出に残るものもあります。期末テストが終わってホッとしているとき、今という時期について考えてみてください。



2024. 7. 2. (TUE).

校長室の窓から

『この子らと共に』～For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『人権学習を振り返って』

7月に入りました。生徒たちは期末テストに向けて頑張っています。また夏休みがすぐ先に迫ってもいます。そして、夏休みになれば部活動の試合やコンクール、発表会が目白押しで開催されます。忙しい時期になってきました。

さて、今年は梅雨入りが遅かった分、7月に入ってから鬱陶しい雨降りの毎日が続いています。そんな中、6月29日（土）に人権学習を行いました。今年度も1時間目は全校集会の形式で私が話をして、2時間目に学級ごとで担任がその内容をより深めるという形をとりました。

今年度の1時間目は以下の通りに進行しました。

①「知る」：人権について基本的なことを知る。差別とはどのような状態のことか。

差別の反対語は何か。我が国に残る様々な差別。などについて。

②「考える」：読み物教材を使って、私が発した問い合わせに対する答を全校生徒が考える。

③「感じる」：動画を観て心を動かし、私がその動画を見せた理由を考える。

④「表現する」：自分の思いや考え、感想や意見、決意などを皆の前で述べる。

①では差別の反対語が強く印象に残ったようです。また、我が国に残る様々な差別の中では、障害のある人に対する差別についてが考えやすかったようです。②では様々な考えが出されました。一人で学んでいては気づけない考えに触れることで自分の考えが深められたり広げられたりしたはずです。③の動画には力があったようで多くの生徒の心に深く響いたようです。各学級で私がその動画を見せた意味について話し合ってもらいました。多くは「人を目に見える部分だけで判断してはいけない。」という答えが返ってきたようです。実は「しんどいことがあったら先生を頼って話してくれていいんだよ。」というもう一つメッセージがありました。④では舞台に上がっててきた人たちが自分の経験をもとに感じたことや日頃から思っていることを語ってくれました。また、学級での話し合いで涙しながら自分の体験を語ったり、翌週の宗教の時間の感話の中で人権学習で感じたことを話している人がいたことは嬉しい驚きでした。

この学習を通して皆さんに伝えたかったポイントをここに書き留めておきたいと思います。それは、「人権学習を特別な学習、難しい学習だと捉えないでほしい」ということです。あなたの前に困っている人や泣いている人がいたらどうしますか。黙って行き過ぎるのですか。「どうしたの？」と声を掛けますか。「私にできることはありますか？」と尋ねますか。マザー・テレサの言葉を思い出しましょう。「愛の反対は、苦しみではなくて無関心です。」愛ある言動、愛のある生き方をしてほしいと思います。



2024. 6. 27. (THU).

校長室の窓から

『この子らと共に』～For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『誇り（プライド）』

「誇りを持て！」これまで何度もそう口にしてきたことでしょうか。生徒に対して、我が子に対して、同僚や後輩の教職員に対して、そして教師を目指す若者に対して。

振り返ってみると、この言葉は人を励ます際に使ってきたように思います。そう、自分では見失いかけていたその人のよさや教師という職業のすばらしさを語りながら発してきました。意気消沈している人に対して多く使ってきましたが、よく考えると確たる実績がないとなかなか誇りはもてないものです。



22日・23日と、京都市中学校選手権総合体育大会陸上競技の部が行われました。1・3年の部の100m、200m、100mH（大会新記録）、800m、1500m、走り幅跳び、4×100mR（共通の部）、4×100mR（低学年の部）で優勝したほか、1年800mと円盤投げでの2位や1年100mでの3位入賞など、多くの種目で大活躍を果たし競技場で圧倒的な強さを見せました。因みに、全15種目のうち3位までに入れなかったのは走り高跳びと砲丸投げ、四種競技の3種目だけでした。団体総合成績は総得点104点で、2位の28点に大差をつけての優勝でした。私のそばでレースを観ておられた方が、うちの生徒の走りを見て「あの子だけ別次元の速さやな！」と驚き交じりの感想を漏らされたのを耳にもしました。

翌朝、初めて公式戦に出場した1年生で入賞が叶わなかった生徒に次のように声を掛けました。「先輩の姿、カッコよかったです。君もあんな風に成れたらいいなって思ったんじゃないですか！？」その生徒は目をキラキラさせながら「ハイ！」と答えました。

中学校の陸上競技場では、「京都光華」のロゴの入ったシャツやユニフォームを着て歩いているだけで「誇り」をもてるのではないかと思います。これまで何度も全国大会へ出場しているソフトテニス部や箏曲部、和太鼓部や茶道部、軽音楽部の人たちも、きっと同じような気持ちになったことがあると思います。

その日の記事をHPにアップし終わって帰ろうとしたとき、グランドで中学陸上部のミーティングが行われていて足を止めました。一人ひとりがその日の感想を述べています。「〇〇（競技）に出させて頂きました。優勝はできましたが目標だったタイムには届かなかったので、これからももっと努力を続けたいと思います。応援有難うございました。」口々にそんなことを語っていました。素晴らしい成績を収めて、喜びと満足感は十分に感じているはずですが、謙虚な気持ちを忘れずそれを言葉にしていました。指導されているのでしょうか、中学生でなかなか言えるものではありません。感謝の気持ちと謙虚さを忘れずに獲得した賞に自信をもつとき、本物の『誇り（プライド）』が沁み出るのだと思います。競技の姿もミーティングの姿もとても素敵でした。

2024. 6. 20. (THU).

校長室の窓から

『この子らと共に』～For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『教育実習生の研究授業から』

教育実習が3週目に入り、今週は月曜日から次々と実習生による研究授業が行われています。先週末から彼女らが出来上がった学習指導案をもって校長室にやってきています。「お時間があれば観にいらしてください。」そう言って。

教師になって40年が経過します。学生時代にはもちろん自分が教育実習を経験しました。教師になってすぐの頃、「自分の勉強にもなるから」と先輩の先生からそう言われて教育実習生の指導を行いました。それから退職するまでの間に一体何人の教育実習生に会ってきたことしょうか。毎年5~6人と会う訳で、それが40年ということは優に200人以上の教師の卵と接してきたことになります。

さて、まずは学習指導案の内容についてコメントします。最近の学生はかつての学生に比べると圧倒的に学習指導案を書くのが上手になりました。現職の先生が書くものよりもよくできていると感心させられる指導案も少なくありません。パソコンを使って作成ができるでで体裁よく見えるのもその要因かもしれません。(当初は当然のことながら手書きでした。)しかし、一番の違いは所属する大学で事前指導が徹底して行われているからだと思います。実際、2年前まで私がそれをしていました。

次に、指導方法をはじめとする学習内容の工夫です。具体的に言うと、学習の展開部分にほぼ必ず「グループ学習(話し合い活動)」が入れられています。学習指導要領のなかに謳われている「主体的・対話的で、深い学び」を実現する方法として手軽で分かりやすいからでしょう。30年以上前の、“自分の机に座っていれば出来”という生徒たちが多い中でだったらできない活動だったかもしれません。生徒が興味をもつだろう教材(ネタ)を探し、楽しいと思える活動を考えることが最重要課題だった時代は変化し、授業のあり方も確実に変わったということでしょうか。

教育実習生の授業を観ていると、私も授業がやりたくなります。『この授業を私がやるとしたら…』参観しながら常にそんなことを考えています。授業後に実習生たちが授業の振り返りを訊きにきますが、一通りの講評をした後には必ず“私なりの料理の仕方”を話すようにしています。

教育実習生の授業の後、参観をした先生方はどうしているのでしょうか。もちろん私のところへフィードバックを求めて来ているわけですからそれに先生方のところへも行っているはずです。それならば、まとまって研究協議の場を設けられないのかと思います。「あの場面での発問は…」「あの机間指導は…」「あの時の板書は…」「グループ学習の時に…」誰かの授業を題材にしてより良い授業を求めて協議をすることこそが研究授業です。そうすることで参観した教師全員が勉強するものです。先生方、大変忙しいとは思いますが、是非ともそんなことも実現してほしいと思います。



2024. 6. 14. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』～For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『The busy day』

Busy と辞書で引くと次の5つの意味が出てきました。1 手がふさがっている、忙しい 2にぎやか、人(車)が多い 3(電話が)話し中で(部屋が)使用中で 4(模様が)ごてごてした 5(人が)おせっかいな、差し出がましい

一大修館『ジーニアス英和辞典』一“busy”は多くの場合「忙しい」という意味で使われます。

また、交通渋滞が起こっている様子も“busy”です。つまり、人や車、予定などが混雑している状態のことです。

6月9日(日)がまさにそんな日でした。この通信でもすでに取り上げましたが、台湾国立台南女子高校の生徒や先生方、関係者の皆様が本校にお越しになり、音楽交流会を行いました。また、京都私学振興会賞の授賞式がありました。この賞は、前年度の京都の私立学校の様々な分野で顕著な活躍をした人や団体に贈られます。昨年度の全国中学校陸上競技愛媛大会において、4×100mRでの優勝が評価されました。また、前日とこの日、京都の私立学校フェアが開催されたのですが、その中で、来年度から高校の制服が変わることをPRするため、在校生たちがファッション・ショーを披露しました。特に、この日の総合司会は本校生徒が務めました。

私としてはどれも観に行きたかったのですが、学校で台南女子高校を迎えるイベントに残ることにしました。別々の日に実施されれば、私だけでなくもっと多くの教職員がそれぞれの場面に参加し、生徒たちを応援することができたと思っています。当日は、私たち教職員も手分けしてそれぞれのイベントに参加したのですが、誰もがすべてを観たいと思っていたことは間違いないありません。

生徒をそのような行事に参加させることには意味があります。“自尊感情”を高めることです。多くの人の前でパフォーマンスをして、それを評価してもらうことで自信がもてるることは、既に本校の多くの生徒たちが知っています。だから、これらの諸行事に参加した生徒たちは、自ら参加を表明し積極的に取り組んでくれました。そして、期待通りにしっかりと自尊感情を高めてくれたと思っています。忙しい毎日を過ごしていると、『たまにはゆっくりしたい!』と思うこともありますが、忙しい毎日にこそ充実感があり、それを終えた後に心の豊かさを感じることができると思うのです。



2024. 6. 10. (MON).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ~ For the students ~

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『交流の意味』

6月9日(日) 台南女子高等学校の生徒と教職員、仲を取りもってくださっている関係者の皆さんのが本校に来られました。私たち大人も、そして生徒たちも徐々に緊張感がほぐれ、最後には右上の写真のような状況になりました。

今回は2017年度と同様に、本校と台南女子高校との音楽交流がメインとなっていますが、元々は音楽を通じた台南市と京都市との交流からスタートしたと聞いています。そこで今回もそうですが、台南女子高校の生徒と教職員の方々は、翌日には京都市長を表敬訪問もされました。

2017年の交流が縁で、本校と台南女子高校との間で姉妹校提携が結ばれ、昨年12月の研修旅行での訪問にも繋がっています。その時の“熱烈歓迎”ぶりは忘れることができません。コンサート会場の案内と整理のボランティアに参加してくれた高校3年生も同じ気持ちだったのでしょう。日曜日の午後からの本番で、お客様の入りが心配されましたが、在校生や保護者、地域の方のご協力もあって何とか客席を埋めることができました。

さて、交流の意味について考えました。この取組は単に一緒にイベントに取り組んで終わりではありません。私は冒頭のあいさつの中で次のように話しました。

I hope that your friendship will be the bridge over Taiwan and Japan.

生徒たちが出ていく社会は日に日にグローバル化しています。そのことが分かって勉強に励んでいる生徒もいます。いつかどこかでこの時の縁がもとで一緒に活動したり仕事をしたりする人がでてくるかもしれません。また、そのことが台湾と日本との懸け橋になってくれることを望むのです。参加された多くの方々から『感動した!』という評価を頂いています。この言葉はコンサートの感動に終わらず、その先の目標を感じてのものだと思うのです。9日の交流会を通じてそんなことを思っています。



2024. 6. 7. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ~ For the students ~

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『日台交流』

アジサイの花が盛りの時期を迎えようとしています。そういえば、朝の情報番組で、今年は例年に比べて梅雨入りが遅く、その結果梅雨そのものが短いのだそうです。今月の中旬以降に梅雨入りするとの予報でした。

梅雨と言えばアジサイの花を連想します。確かに梅雨の雨とアジサイの花、そこにカタツムリが乗っかっている様子には情緒がありますね。今年は今のところ雨が少なく気温が高くなるのも遅いように思いますが、アジサイの花は例年と同じように咲き始めました。花の開花には日光の量が大きく影響するらしいですが、気温・雨の量との関係性が気になります。

さて、台湾の台南女子高等学校との交流音楽会が明後日（9日）に迫ってきました。昨年12月の研修旅行で当校を訪問して以来、半年後には本校に迎えるということが頭から離れませんでした。あっという間に半年が過ぎたことになります。今日まで、あいだを取持ってくださっている“日台おこしやす実行委員会”の方とメールのやり取りを通じて内容を練ってきました。出演してくれる吹奏楽部・和太鼓部・箏曲部の顧問の先生とも細かな打ち合わせを重ねてきました。また、音楽会終了後に行う茶話会（交流会）を仕切ってくれる国際挑戦科の先生とも協議してきたので、“いよいよか！”という気持ちが強いです。

元々は学校と学校との交流だと思っていたのですが、在日台湾の要人の方々や京都府市からのご来賓の方々がたくさん来られる大きな催しに発展しています。今では、台湾と日本との国同士の交流会と言っても過言ではない規模になりました。

10日は京都市長への表敬訪問、11日には本校の伝統文化授業の体験もされます。

明後日と11日、向こうの生徒たちや先生方をどんな風に歓迎するのかについても随分と話し合ってきました。全校集会を開いてセレモニーをすることも考えましたが、今回は日常の学校生活に参加してもらおうということに落ち着きました。しかし、大事にすべきは気持ちです。半年前、現・高校3年生たちが向こうの学校を訪れた際にはそれこそ中国風の『熱烈歓迎』を受けました。今度はこちらの番です。こちらは京都人らしく『おもてなしの心』をもってお迎えしようと思います。

全校生徒の皆さん、そして保護者の皆様、何かとご都合はあろうかと思いますが、明後日の発表会には是非ご参加いただき、台南女子高校の生徒と本校生徒との交流の場面をご覧にいらして下さい。生徒たちは、きっと一生の思い出をつくると思います。



2024. 6. 4. (TUE).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ~ For the students ~

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『ドラマティック』

先週末は各競技で高校のインターハイ予選大会が行われました。部活動を頑張ってきた生徒にとっては最も大切な大会です。陸上では100mHと7種競技で見事に優勝。京都府 No.1となって近畿大会進出です。惜しくも2位となった5000m競歩、5位入賞を果たした同じく5000m競歩の選手も15・16日の近畿大会へとむことができました。

100mH走では1年生が決勝にまで進み、『近畿大会出場か！？』というところまで来ていたのに最後のハードルに脚をかけて転倒。ゴール後に、優勝した3年生が涙にくれるその選手に声を掛けたシーンがとても印象的でした。まだ1年生です。この悔しさをバネに大きく強く成長してくれることを念じています。

ソフトテニスでは個人戦で、全国へ行ける8ペアの内7ペアを本校の選手が独占しました。惜しくも負けたペアも“あと少し”というところまで行っていただけに残念でなりません。まじめに一生懸命練習してきた選手だけに全国の舞台を経験させてあげたかったです。月曜日の朝、そのペアだけが練習していたのが堪らなかったです。

翌日の団体戦では、決勝戦までは順調に勝ち上がったものの、その大一番はなかなかしんどかったです。相手は昨年度と同じ。『今年こそは！』と闘志むき出しで向かってきました。試合は3チームの点取り戦。本校の1番は前日の優勝ペアです。相手は予想外に早く負けており、その悔しさと反省をこの試合にぶつけてきました。“負けて元々の強気の攻撃テニス”はやりにくいものです。守りに入ろうものなら一気に押し切られます。何とか凌ぐものの、じりじりと追い詰められて負けてしまいました。大きなアドバンテージを相手に与えてしまったことになります。2番目に出場したペアが頑張りました。常に団体戦のメンバーではない選手が監督の大抜擢に見事に応えました。私が選ぶならこの選手にMVPを与えたいと思います。3番手勝負は、これも相手が強気で攻撃してきます。しかし、このペアは決して受け身にならず同じように攻撃し続けました。一進一退の好ゲームですが、観ている方はハラハラ・ドキドキの連続でした。たくさんの、本当にたくさんの応援の力もあって勝ち切ることができました。陸上とソフトテニス、本気で頑張る姿は美しいと改めて感じたところです。

月曜日の朝、バレーボールの選手に出会いました。「試合どうやった？」「橘高校、凄かったです。」よりによって、京都府で一番強い学校と戦った彼女は清々しい態度でそう答えました。勝っても負けても心身が成長するものですね。みんな、お疲れ様でした。



2024. 5. 24. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』～For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『海外留学』

昨(23)日、留学説明会を行いました。主に国際挑戦科の生徒を対象にしたものですが、それ以外のコースの生徒も少なからず参加していました。本校では、高等学校在籍中に留学することを推奨しており、特に国際挑戦科では3か月・6か月・1年と、長期の留学も可能なカリキュラムになっています。方面はニュージーランドとカナダ。どちらも世界の治安がよい国の中でもトップレベルにあり、女の子の留学先としては安心できる国です。



2つのエージェント会社の方がそれぞれの留学先や向こうでの学びについてプレゼンされました。その内容は実に魅力的で、私も聴いていて『行ってみたい!』と感じましたし、親の立場になれば『行かせてみたい!』と思ったところです。

実は、今も国際挑戦科の2年生の中にはこの両方の国で学んでいる生徒がいます。また、3年生は既にそのプログラムを終えて帰国してもいます。プレゼンの中で、3年生が当地へ行って2か月余りたった頃のインタビューが流されました。一様に『初めは苦労けれど今は楽しく過ごしている。絶対に来てよかった。』と答えていました。

ところで、私には2人の息子がいます。上の息子は公立中学校で国語の教師をしていますが、下の息子は現在タイのバンコクで働いています。その下の息子が今から8年ほど前のこと、「1年間、大学を休学して留学をさせてほしい」と言い出しました。

昨日もそんな話がされていましたが、彼が言うには、「これからは日本の中だけで働く時代ではなくなる。今後、日本企業は市場を求めてどんどん海外に進出していく事になるからそれに応じて日本人はもっと海外で働く必要が出てくる。英語力を身に付けることと海外で生活することを通して生きた勉強をさせてほしい。」というのです。

息子たちは自宅から大学に通っていたので一人暮らしの経験はありません。妻は心配と寂しさで戸惑っていましたが、本人の思いと決意は固く、応援することに決めました。まず驚いたのは費用です。『留学にはこんなにお金がかかるのか!』とビックリしたことを思い出します。それでも何とか工面して1年間ロス・アンジェルスに行かせました。通信機器の発達もあって頻繁に連絡を取ることもでき、思っていた不安はどんどんなくなっていました。大学卒業と同時に海外に支社をもつ企業に就職を果たし、海外勤務を希望し続けてきた彼にやがてそのチャンスが巡ってきました。20歳代でマネージャーとして現地の人の上司となって頑張っています。因みに、タイではある程度裕福で優秀な人は、日本の企業に就職するために英語を勉強するそうです。

生徒の皆さんには、自身の可能性を思いっきり伸ばして欲しいと思います。息子の経験からも、生徒の皆さんには絶対にこの機会を活かして留学をしてほしいと思います。ただ、昨日も言っておられましたが、光華の皆さんにはラッキーです。高い留学費用を出して行かせてもらえることに対する感謝の気持ちは決して忘れないでください。

2024. 5. 17. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ~ For the students ~

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『おもてなしの心』

今週は多くのお客様をお迎えし、学校全体でよい緊張感をもって対応することができました。

14日(火)には京都市内を中心とした中学校の進路指導主事の先生方、15日(水)には京都市内を中心とした学習塾の先生方、そして16日(木)は中国北京市周辺の高校の校長先生方です。

14日と15日の学校説明会の目的は、教育内容を中心に本校の実態を詳しく知って頂き、『この学校なら安心して生徒を送れる』と思ってもらうことです。 **北京市近郊の高校の先生方に対して**

16日は、京都光華女子大学がご来校頂いた高校の卒業生を留学生として受け入れるねらいがあり、その際に本校とも友好関係を結ぼうということで実現しました。

お客様をお迎えするにあたって、私の役割は最初のあいさつです。冒頭の校長のあいさつで、その学校の雰囲気を大体知ることができるということは、立場が反対の場合に経験して理解しているだけに重責を感じながら行いました。

昨年度を上回る中学校と学習塾の先生方が来られ、私の話に真剣に耳を傾けてくださいました。このエッセイの中で校長の思いや考えを生徒や保護者の方に伝えていることを話したり、毎日撮り続けて“アット・KOKA”にアップしている写真の中から最新のものを紹介しながら学校の雰囲気を感じたりしてもらいました。最後に、『預かった生徒たちを大切にする』ということを強調もしたつもりです。

参加された方々にアンケートを記入してもらいました。最後に「京都光華をどのような学校だと感じておられるか」という設問を設けてあります。

○面倒見がよい ○生徒に丁寧に寄り添ってくださる ○安心して生徒を送れる
○大学への内部進学があって進路保障の面でも安心 ○生徒の力を伸ばしてくれる
○落ち着いた学校 ○礼儀・マナー教育が特徴的 ○スポーツにも力を入れている
頂いた回答をみると、概ね私たちが大切にしてきた内容が書かれており、進路指導をされる方々に本校教育の思いが伝わっていることが感じられて嬉しく安心しました。

16日の北京周辺の高校の校長先生方も、本校教育の内容や授業中の生徒の様子を見られてたいへん感心されたようです。中には自分の娘を通わせたいからと「学費は幾らかかるのか」と具体的な質問をされる方もおられたほどです。“very cheap”という言葉が飛び出し驚きました。中国、特に北京近郊の私立高校に通うためにかかる費用がどのくらいか知りませんが、おそらくそれと比較され、更にうちの生徒の学ぶ様子から判断されての言葉だったのだと解釈しています。

それぞれのお客様への対応で、教職員が特に大切にしたのが「おもてなしの心」です。また、そのことは生徒にも伝えています。笑顔で明るく挨拶をする生徒に触れて、私たちの説明が証明されたのだとも思っています。皆さん、お疲れ様でした。



2024. 5. 11. (SAT).

校長室の窓から

『この子らと共に』～For the students～

京都光華中学校高等学校
澤田 清人

『自分で考えて行動すること』

一昨日、小中高合同で避難訓練を実施しました。想定したのは地震です。我が国は世界でも有数の地震多発国で、残念ながら何年かに一度は死者を伴う大地震が発生しています。ここ京都市南部には“花折断層”が通っており、それが動いて大地震が起こる可能性は少なくありません。現に今朝も小さな地震ですが発生しました。だからこそ常に備えを徹底しておく必要があります。そこで、避難訓練などの行事の際にそのことを真剣に考えさせる機会を設けています。一昨日の講評では、次の5つのことを強調し、訓練後の学活(HR)でも担任の先生とその内容を深めてほしいと伝えました。

1 先生の指示に従う 2 騒がない・慌てない

3 小さい子を優先する 4 避難者を支援する 5 家族と話をする

本校敷地には小学1年生から高校3年生までが生活しています。中学生と高校生には小さな子どもたちに心を配り、何ごとも優先させてほしいと伝えました。また、不幸にも被災した場合に学校は地域の避難所になり、多くの地域住民が来られます。その際には教職員と一緒に避難者の支援に手を貸してほしいことを強調もしました。阪神淡路大震災や東日本大震災の時に学校が避難所になった際、中学生や高校生が大活躍をしてくれて大いに頼りになったということを友人から聞いたこともあります。

人は危機的な状況に置かれたとき、その人間性が現れるものです。「自分だけ・我先に！」と行動するのではなく、常に周りの状況を冷静に見て、「全体の中の一人」として最善の行動がとれるようにしてほしいと思います。

また、今日は「授業体験会」と題して入試イベントを実施しました。中学校入試では英語活動と華道体験を、高校入試では華道体験をしてもらったところですが、参加してくださった保護者の皆様や小中学生は、イベントを盛り上げようと活躍する本校生徒の姿に感心されているようでした。

ピンクのポロシャツに身を包んだ“フラワーズ”の生徒たちの他に、私のあいさつの場面には中学ソフトテニス部と高校スキー部のキャプテンを連れ出しました。汗をかいた練習着姿の生徒が現れて参加者の皆さんには驚かれたことだと思います。彼らは、今朝突然依頼されたにもかかわらず、見事に私の質問や指示に従って本校をPRするコメントをしてくれました。“フラワーズ”の生徒たちや2人のキャプテンが、自分で考えて生き生きと行動し発言する生の姿は、本校の様子を知ってもらう上で、教師のどんな説明よりも説得力があったと思います。

すべての生徒が、京都光華のために自分のすべきことを考えて行動してくれることが、本校をより良い方向へ導いていく最善の方法であると改めて感じたところです。



2024. 5. 7. (TUE).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ~ For the students ~

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『輝く姿』

GW が終わりました。そして、今年もまたたくさんの方の試合の応援に行きました。それぞれの試合で、学校で見せるのとは異なる生徒の姿に触れ、教師としての喜びを感じたところです。現在のところ、中学生の体育系の部というと、右の写真の通りバドミントン部と陸上部とソフトテニス部があります。

(※スキーはこの時期には試合がありません。)

バドミントンの試合では、勝てない相手ではないとは思ったのですが、上手くリズムが合わず相手のペースで試合が進行。ミスも重なって惜しくもセットカウント1-2で敗れました。

陸上競技では、100m・200m・100mH・1500m・走り幅跳び・4×100mRでそれぞれ優勝、800m・円盤投げで準優勝と、今年もまた圧倒的な力を発揮して総合優勝を果たしました。

怪我で長く練習を休んでいた選手が本番で久しぶりに全力疾走しました。周囲の心配をよそに見事にカムバックを果たしての優勝です。また、予選で不本意な成績で決勝に臨んだ選手が1位でゴールテープを切ることもできました。これらの結果の背景にはそれぞれのドラマがあることが想像できます。そのことが感動を覚えさせます。選手たちはまだ15歳以下ですが、よく自分自身を見つめ、心身が鍛えられ、必要に応じて気持ちを切り替えて試合に臨んでいます。本当に凄いことです見事です。

団体は、2位が26点、3位・4位が23点のところ、何と68点を獲得しての優勝でした。上の写真は総合優勝を果たした際の表彰の様子です。

ソフトテニスは、3年生が全国大会の前哨戦に出場するため石川県へ遠征をしていた関係で、5日の準決勝と決勝は1・2年生で戦うことになりました。それでも皆が力を発揮して危なげない優勝を果たしました。3日に行われた個人戦では、ベスト8は本校選手が独占。その後の試合で上級生が下級生に敗れるという波乱も起きましたが、どの試合も見事な戦いぶりでした。私も経験がありますが、下級生が勢いをもって向かってくると、精神的な重圧がかかって案外やりにくいものです。最終的に第1シードの3年生が優勝を果たしましたが、準優勝に輝いたのは本校の1年生ペアでした。私が会場に着くなり、目に涙を一杯にためて試合結果の報告に来てくれた3年生ペアがいました。1年生に負けた悔しさが全身から感じられました。また、学校に帰って解散になるや否や、3年の2人がコートでボールを打ち始めました。

次の公式戦は全国へつながる夏の大会です。今回の反省を活かして、今日から頑張って練習してほしいです。そのことを通じて心身を鍛えてほしいと願っています。



2024. 4. 25. (THU).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ~ For the students ~

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『2つの花まつり』

桜の木がすっかり緑色に替わりました。一方、道路沿いのハナミヅキが美しく色づいています。また視線を下げるときツツジやサツキが咲き始めています。春は彩りが鮮やかで私たちの目を楽しませてくれますね。

さて、今春は2つの「花まつり」を経験しました。「学園花まつり」と「仏青連花まつり」です。後者については後ほど詳しく述べることにします。「花まつり」はお釈迦様の誕生をお祝いする仏教行事です。そういえば、幼い頃、私の生まれ育った地域でもこの行事がありました。意味も分からず、春の温かさの中でワクワクしながら友達とお釈迦様に甘茶をかけていたのを思い出します。

「学園花まつり」は19日（金）に行われました。今年も素晴らしい天候に恵まれて盛大に催されました。会場は生徒が持ち寄った色とりどりの花にあふれ、楽しい雰囲気の中で進行しました。大学校地のテニスコートに園児から高校生までが集まります。大学の授業も休講で、多くの大学生や関係者の方が周りで観ておられました。

開会に先立って小学生と中高生の吹奏楽団を先頭にパレードが進みます。中高生のバトンツワリングはひと際参加者の目を引きます。中高の聖歌隊の美しい歌声が会場に響きます。そのような中、代表生徒による献灯・献花、散華（さんげ）、灌仏（かんぶつ）と行事は進行します。最後まで明るく華やかな雰囲気は続き、中学生高校生たちも十分に楽しんだことだと思います。

今日25日（木）には「仏青連の花まつり」が行われました。仏青連とは、正式には「京都府中学高等学校仏教青年会連盟」と言い、京都府内にある仏教系の12の私立学校によって組織されています。宗派こそ異なりますが、仏様の教えに思いを寄せつつ自らの生き方を見つめ直すとともに、各校が刺激し合いながら連携する機会です。輪番制で当番校が決まり年に3回（花まつり・成道会・涅槃会）の行事を行います。今年度は本校が当番校です。当番校には他のすべての学校の代表生徒が集まります。

会場が光風館の講堂ということもあり、「学園花まつり」とは違って厳粛な雰囲気の中で進行しました。本校の全校生徒による集会のあり様を他校の人たちに知ってもらう絶好の機会であったとも思います。司会・献灯・献花・焼香・散華・灌仏、そして合唱、更に会を盛り上げてくれた吹奏楽部と、代表生徒たちも本当に頑張ってくれました。客席の参加者も含めて全員が素晴らしい態度で臨みました。参加した他校生たちは『ここまでやるかっ！』と驚いたことだろうと思います。

2つの「花まつり」を通じて、改めて宗教行事の大切さに気付いた思いです。これらの行事の中で、生徒たちは確実に自分を見つめ、心を豊かにしています。



2024. 4. 17. (WED).

校長室の窓から

『この子らと共に』～For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『順調な滑り出し』

私事から書き始めることをご容赦ください。実は昨晩、我が家に新しい命を授かりました。二世帯住宅で暮らす息子夫婦のもとに長女の誕生です。私には2人の息子がありますが、女の子は初めてです。あついや、檸檬ちゃん（愛犬です）ごめんね。大切な姫の貴女のことを忘れていたわけではありません。ただ、既に12歳を越えて人間の年齢としては私を越してしまったかもしれませんので…（笑）。

午後9時を過ぎた頃、妻と病院に行きました。保育器に入った赤ちゃんをガラス越しに見るものと思っていたのですが、何と触れる状態で初対面をしました。小さな命は、一生懸命に泣き、お母さんのおっぱいを探しているのか首を左右に動かしています。まだ目も開きませんが初孫の誕生を心から嬉しく思います。初めて父親になったときと初めておじいちゃんになった今では少し気持ちが異なりますが、どうか元気にスクスクと育ってほしいと昨晩からそればかりを願っています。

さて、本校生徒たちの令和6年度のスタートはというと、概ね順調です。毎朝校門で生徒を迎えていますが、中高新1年生とのやり取りが何とも新鮮です。中には内部進学した人もいますが、それでもそれぞれ中高の新しい制服に身を包んでいるだけでワンステップ上の生活に成ったんだと思えるのが不思議です。

今朝は、こんなことがありました。警備員さんと話をしていると「すみません！」と声をかけられました。「今日初めて自転車で来たんですけど、何処にとめればいいですか？」「このまま真っ直ぐに進んでいくと地下の駐輪場に入るスロープがあって…」とそこまで言ったときに自転車を押した3年生が通りました。「この先輩に付いていったらいいよ。」と内容を改めました。心の中で3年生に対して『宜しく頼むね！』と念じながら。また、職員朝礼が始まる時間が迫ってきたので、校舎に入ろうとした時です。2人の中学新入生が私の前に止まり、照れくさそうに聞き取れないくらいの声で言いました。「あのー、保健室は何処ですか」「よっしゃ、ついて来て！一緒に行こう！」こんな何でもない会話ですが、それをとても新鮮で楽しく感じています。

授業を観て回るのを日課にしています。授業が始まって約1週間、授業を受けているどの姿も穏やかで落ち着いています。内部進学生と外部生が交じり合った新しいメンバーでの学級には独特の緊張感もあるようです。また、互いのことを知り合っている中高2・3年生にしても、新しい先生との出会いがあります。今後、生徒たちも先生の方も徐々にお互いのことを理解し合い、心の距離を詰めていくのだろうと思いながら授業の様子を見ていると何とも言えずワクワクした気持ちになります。

今の新鮮な気持ちを忘れず1年間を過ごしてほしいと思います。新しい命のために私のできることを考えながら、目の前の生徒に対してできることを考え続けます。



2024. 4. 10. (WED).

校長室の窓から

『この子らと共に』～For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『R6のスタート』

8日に始業式、9日には入学式を行って令和6年度が正式にスタートしました。手前味噌で恐縮ですか、教職員の協力と生徒の頑張りのお蔭でどちらの式もとてもよかったです。始業式と入学式の様子をここに記録しておきます。

これら2つの式で生徒に提示したのが今年度のキャッチフレーズです。これについては、年度初めの職員会議で既に教職員とは共有しています。

“Ask what you can do for the KOKA！”で、「あなたが光華のためにできることを考えましょう。」と訳しました。

入学式では、中学1年生が対象になっているため理解が難しいだろうと思って“For the KOKA！”とだけ示しました。

このフレーズは第35代アメリカ合衆国大統領のジョン・F・ケネディーの就任演説から引用しました。大学受験を目指して勉強していたときにその文章に触れ、17～18歳の私は感動と衝撃を受けたことを覚えています。該当の部分を以下に示します。

“My fellow Americans, ask not what your country can do for you, ask what you can do for your country. My fellow citizens of the world, ask not what America will do for you, but what together we can do for the freedom of man.” 日本語訳はこうです。「我が同胞たるアメリカ国民よ。この国があなたに何をしてくれるのかではなく、あなたがこの国のために何ができるのかを聞いてほしい。我が同胞たる世界の市民たちよ。アメリカがあなたのために何をしてくれるかではなく、共に人類の自由のために何ができるかを問おうではないか。」

2・3年生が対象の始業式では次のことも強調しました。目標を設定しそれに向けて努力をしてほしいと言った後です。目標が達成できなかったときに、その原因を厳しく自分へ向けてほしいということです。人はうまくいかなかったときや上手くいかないときにその原因を周りの人や環境に求めがちです。それではダメだと言いました。

「何が悪かったのか！？」その原因を自分の中に求め、謙虚に反省して次に生かせる人が伸びていくのだと強く訴えました。

始業式では上の写真の通り、私の話を聴いた生徒たちの多くが自分の今年度の目標を発表しに登壇してきました。仮にうまくいかなくとも構いません。それに向かって精一杯の努力をすれば、それは必ずその人のそして京都光華のためになるのだと思うのです。さあ、焦らず慌てず、じっくりと定めた目標に向かって動き出しましょう。



2024. 4. 5. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』～For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『今年はどんな年に…』

今年は3月の気温が低く、おかげで校門の桜は今が見頃となっています。来週早々に始業式と入学式とを迎えることになるので、どうやら今年は桜の花が満開の新年度始まりとなりそうです。

そのような中、四月になって以来毎日、全教職員は新年度の準備を進めています。初めて学級担任をする教員もいれば、まったく新しい仕事に携わることになる者もいて、教職員の方も“ドキドキ”と“ワクワク”的な気持ちをもって行動しているはずです。

さて、私はというと、何も分からず赴任した昨年度とはかなり気持ちが異なります。久しぶりに学校の最前線に戻ってきた昨年度は、断然“ワクワク”感が“ドキドキ”感に勝っていました。しかし、今年度の気持ちはすこし違っています。一年間を過ごしてみて、本校の課題を「我がこと」として感じているからです。もちろん、課題のない社会などありません。それを一つひとつ解決しながら進んでいくのが社会であり組織です。もちろん学校もそうです。一人の生徒が背負わされている課題、本校生徒全体に共通する課題、また今学校が直面している課題もあって、どれもこれも、とても簡単に解決できるものではなさそうです。新たな年度を迎えるにあたって、一つひとつに丁寧に向き合い、解決していく決意を新たにしているところです。

こういったことはこれまで経験したことがありました。その際、その状況をどのようにして抜け出してきたかを思い返してみるといつも同じ解決方法をとってきたことに気づきます。ここは学校です。生徒がいます。ですから生徒の抱える課題の解決が最優先です。生徒一人ひとりが本校の課題を作っています。だから目の前の一人の生徒の課題解決に目を向け、教職員が力を結集して取り組むのです。そうすると、いつの間にか不思議と他の課題までが次々と解決するということを幾度も経験しました。

今回のエッセイのテーマを『今年はどんな年になるのか』としようとしたが考え直しました。それでは先月の修了式に全校生徒と全教職員とで確認した“上向き、前向きの考え方・生き方”に反するからです。そうすると、テーマを次のように改めるべきであると気づきました。『今年はどんな年にしようか』です。

昨年度赴任した時にどんな時も「この子らと共に」過ごそうと決めました。新しく入学してくる123人の生徒を含め、新しい京都光華中学校高等学校がスタートします。ほとんどの生徒たちは新年度に対して“不安”よりも圧倒的に“期待”をしているはずです。多くの学校の中から本校を選んで進学して来てくれた生徒たちに丁寧に向き合い、その子たちの個性と能力を大切にし、それを十分に引き出し伸ばします。

目の前の生徒を徹底的に大切にすること、それが本校の信条です。そして、生徒のキラキラと輝く姿を見ることが私たちの喜びです。令和6年度も頑張りましょう。



※カナダの高校生との交流会より

2024. 11. 1. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』～For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『目標』

一気に朝夕の気温が低くなってしまった。今朝など、愛犬の散歩のため外に出た私は、思わずその寒さに身を縮めたほどです。一方、ようやくキンモクセイの強い香りが漂ってきました。これまで咲いていることは自分で認めてはいたものの、『今年のモクセイは香りが少ないなあ』と感じていたところです。おそらく、気温の低下によって



空気が澄んで、より遠くまで香りが漂ってきたのだろうと勝手に解釈しています。

さて、先週「Move！」が大成功の裡に終了しました。昨年度から感じていることです、この行事の異常なまでの盛り上がりのように嬉しく驚いています。生徒たちは各競技に夢中になります。いっさい手を抜くことなく全力を発揮します。思いっきり走り、跳び、投げます。その全力を尽くす姿に目を奪われどおしです。なかでもリレーの迫力は凄いです。陸上部の生徒を中心に運動部の子たちの走力は素晴らしい、女子だけなのにこれほど盛り上がるものだと感心させられています。

そしてメイン・イベントともいえるのが高校3年の創作ダンスです。

この日のために1学期から取り組んできています。前号にも書きましたが、ここまで来るまでに様々な出来事があったに違いありません。泣き、笑い、喜んだり悔しく思ったりの繰り返しの中で本番を迎えたことでしょう。本番は思い思いの衣装も相まってダンスが一層華やかに見えます。選手宣誓の中で代表の生徒がこう言いました。「これまで見る側でしたが、楽しみにしていたダンスを今年はいよいよ踊れます！」本音が出ていると、力強い宣誓の中でもこの部分が特に強く印象に残っています。

「Move！」の翌週の月曜日、クラスのリーダー格となって頑張っていた生徒と校内で会いました。「ダンス、よく頑張っていたね」「先生、何か次の行事が欲しいです。」「どういうこと？」「だって、目標がなくなって面白くないんやもん」

といえば、この生徒をはじめ少なくない生徒が“抜け殻”的なようになっているのを感じました。これまで「Move!」に向けて全力で取り組んできた生徒にとっては、それが終わったとたん、次への切り替えが難しいのも理解はできます。

生徒との会話の最後には次のように言いました。「次は、勉強、がんばれ！」

今振り返ってみると、勉強を頑張るというのは高校3年生にとっては当たり前すぎて、すぐに全力を注ぎこむ対象にはならないのかもしれない感じています。

人には頑張るべき「目標」が必要なのだと、その子と話したことをきっかけに再認識しています。私の、本校の、本校生徒の、生徒の保護者の方の、教職員の…それらが目指すべき目標は何でしょうか。それをしっかりと見極め、その実現に向けて全力を尽くすことこそが人生を豊かにし、有意義な時間を過ごすことに繋がるのだと思います。「目標がなくなって面白くないんやもん」その言葉が何度も思い出されます。